

師範學校編輯小學讀本

二

特34

969

大日本教育會館

四	二
三	六
號	函
五	三
册	架

小學讀本卷之二

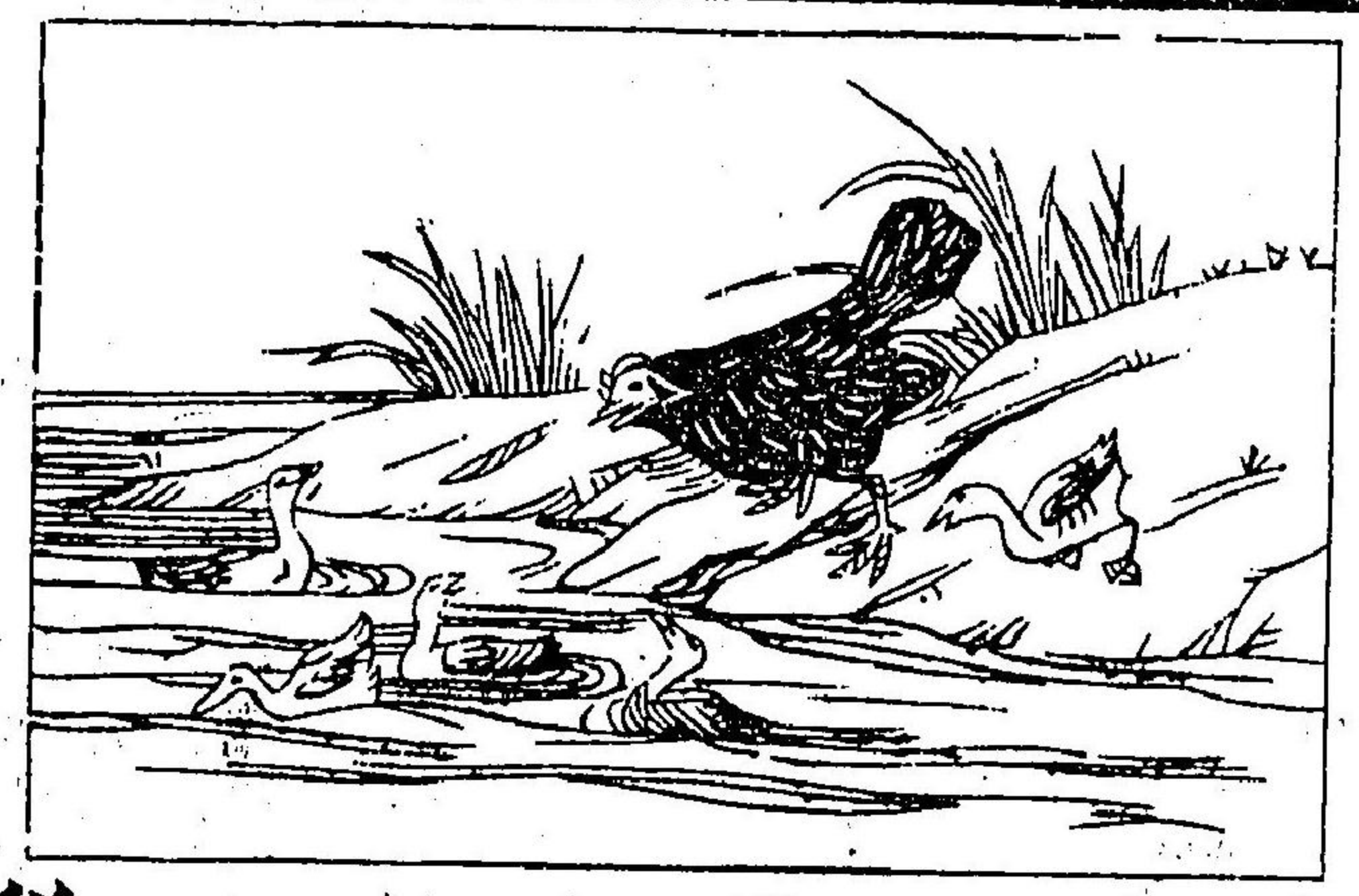
第一

此女兒ハ人形ヲ持て
久。汝ハ人形ヲ好む
久。我モ甚コキヲ好
め。此男兒モ人形
ヲ持てりや。否男兒
ハ人形ヲ持たざらん。



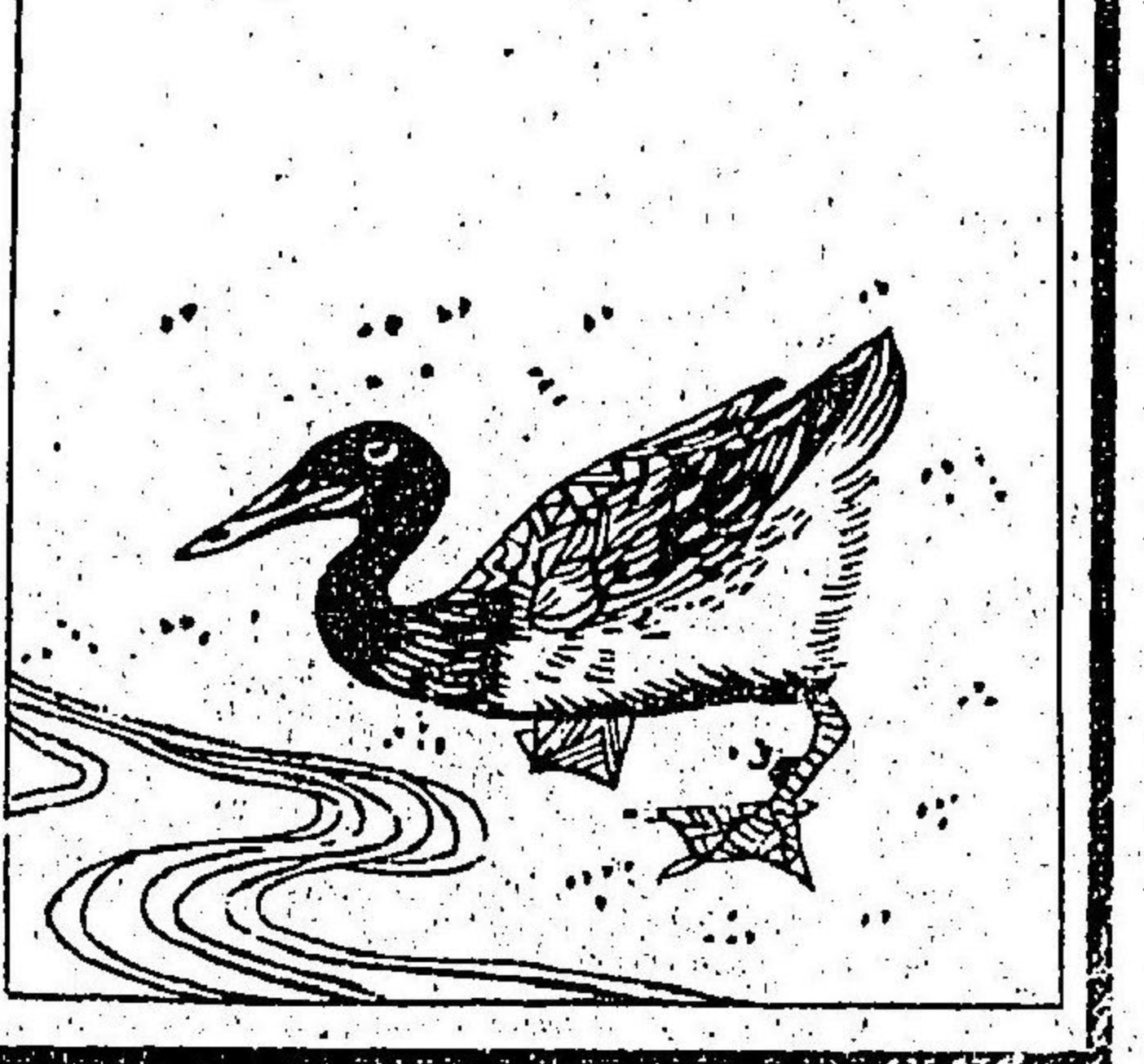
田中義廉 編輯
那珂通高 訂正

鞭を持てり男児の遊へ女兒と異なるべなり、
老たる牝雞鷺の子と多く伴へり。○此鷺の子へ



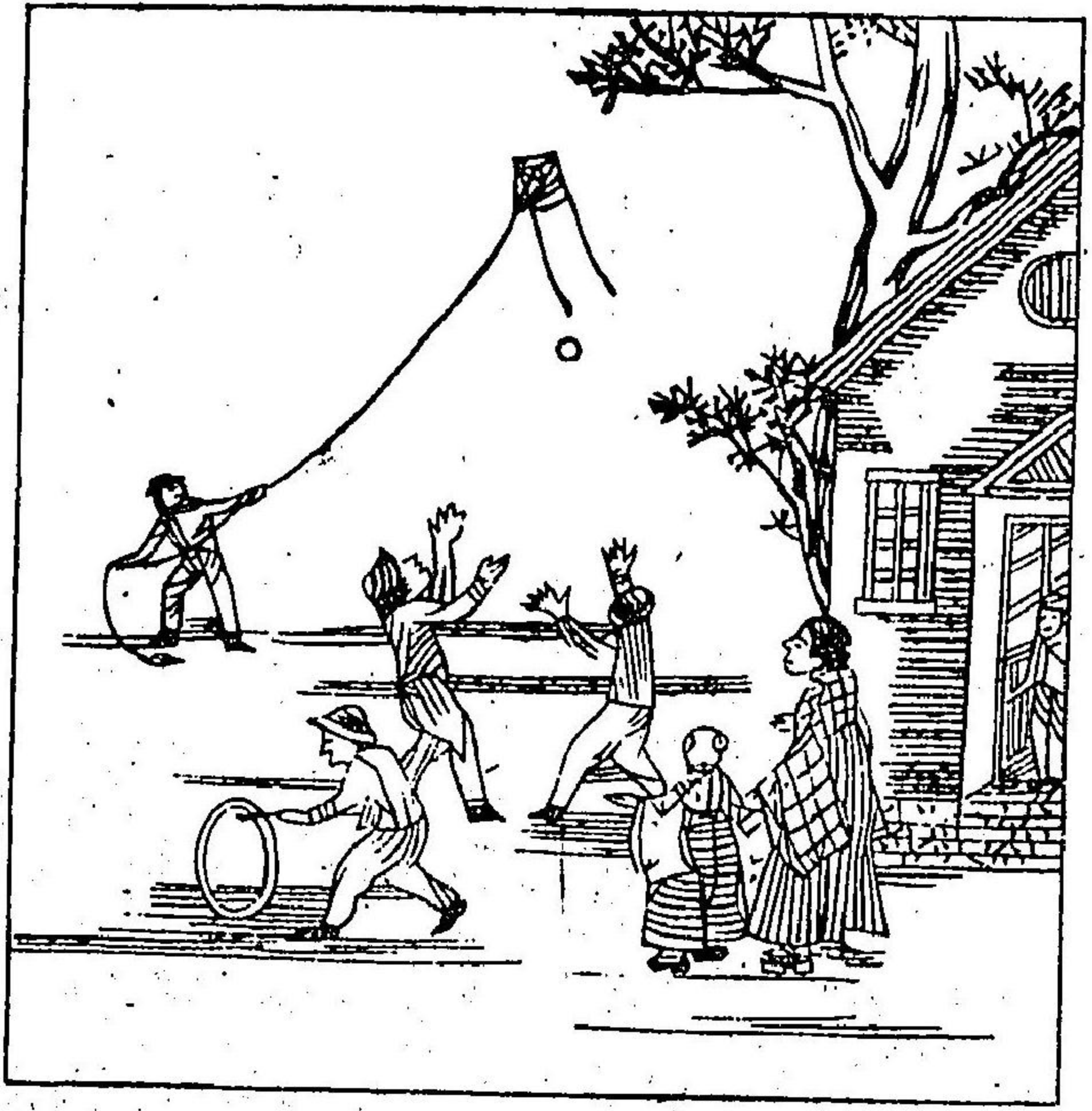
皆水の中へ飛入る。○此鳥へ
其性水上へ泳ぐことを好めり。
○牝雞へ其沈と溺まんことを
恐きて其憂ひ悲めり。○然まど
も鷺の子へ牝雞の心を量り知
らざしく隨意に泳ぐ。○牝雞
へ何を憂ひ悲むと思ふや。○牝
雞へ此鷺の游水鳥あるを知ら

冷しく我子と思ひ悲めるなり。
爰も成長したる鷺なり。○鷺の
嘴へ牝雞の嘴より大なり。其
足も蹠なり。故も水へ入りて能
く泳ぐこととを得るあり。



此へ何家あるぞ知まらや。○これへ學校あるべ
し。數多の男女の子。此家は通ふを以て知らまた
り。○汝へ小児の遊歩場へ出で遊ぶと見たり
や。○數多の小児出で走るものなり。球を弄ぶも
あり。或へ紙鳥を揚げ或へ輪を廻をして遊べり。

○男児も、女兒も、學校
 まで、能く勉強まぐ
 べし。○能く勉強したる
 後、非まき、遊歩をゆ
 るさるとも、誠、樂ま
 ことへ、ふまきものあり、
 今此子の、釣りたる魚
 へ、鯉あり。○汝も、魚を
 釣り得たるとき、へ、能く心を用るよ、釣糸を切ら
 ることあるべし。○天曇り、雨少しく、降る来



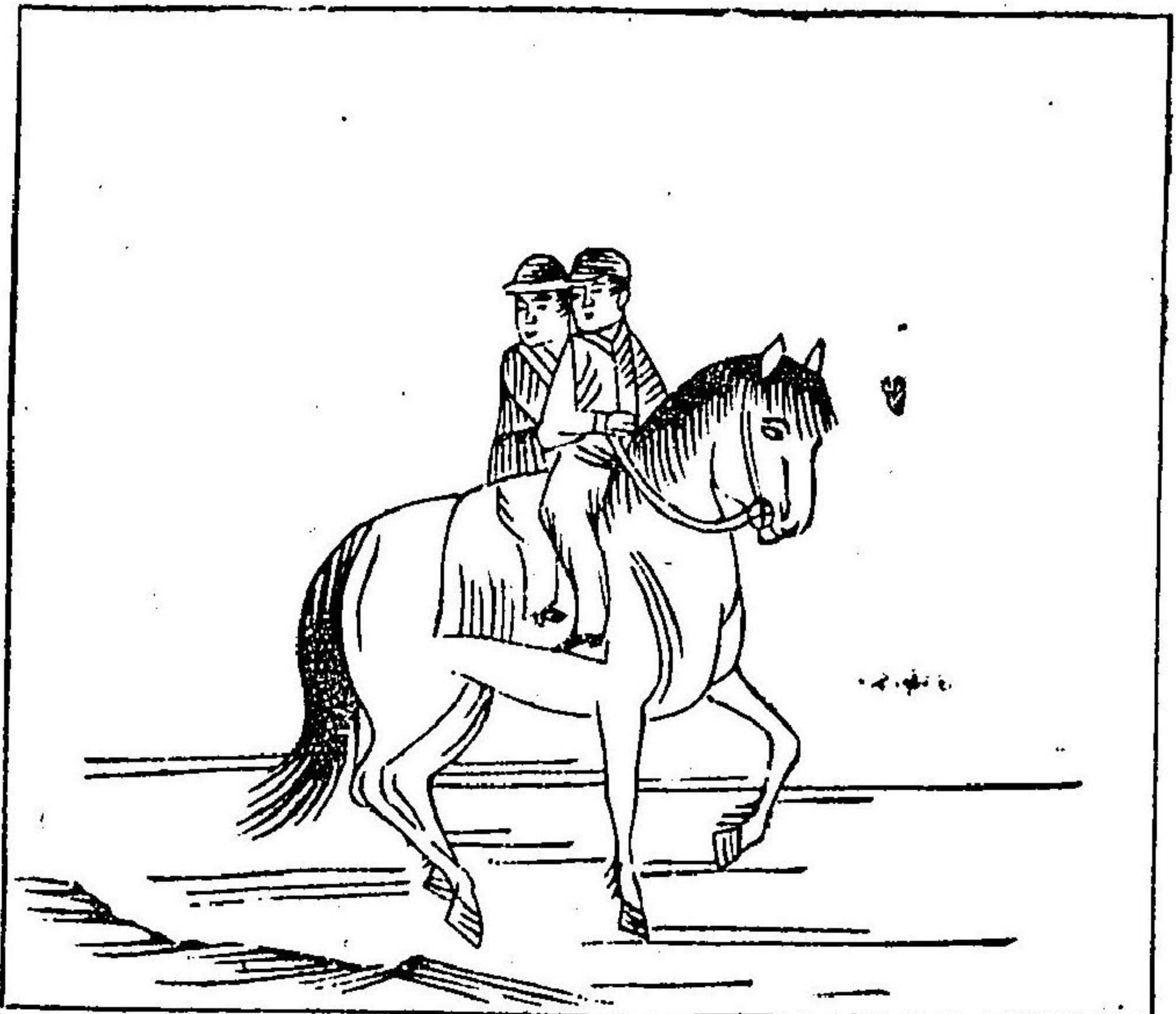
きり、○魚を釣るよ、雨天
 とまきを宜しとまらるの。○然り
 少しく雨降りて、風あく、暖あ
 る日と宜しとまらる。○汝も、魚を
 釣るを以て、宜しき事と思ふ
 う。○然り、魚を釣りて、食まら
 る、悪しき事、なぐらと雖、釣
 りたる魚を、弄びて、徒に捨つ

るへ、宜しき事、
 男児も、女兒も、
 〇これ、學校へ行く途中、

り。○今急ぎて、學校へ行かん
 と、思ふがゆゑ、男兒へ、女兒
 と助けて、走らう。○此兒等へ、
 學校へ行くと、樂と思へりや、
 ○然り、此兒等へ、其性善きも
 のふまじ、學校へ行きて、學問
 することを、第一の樂と思ふあり、



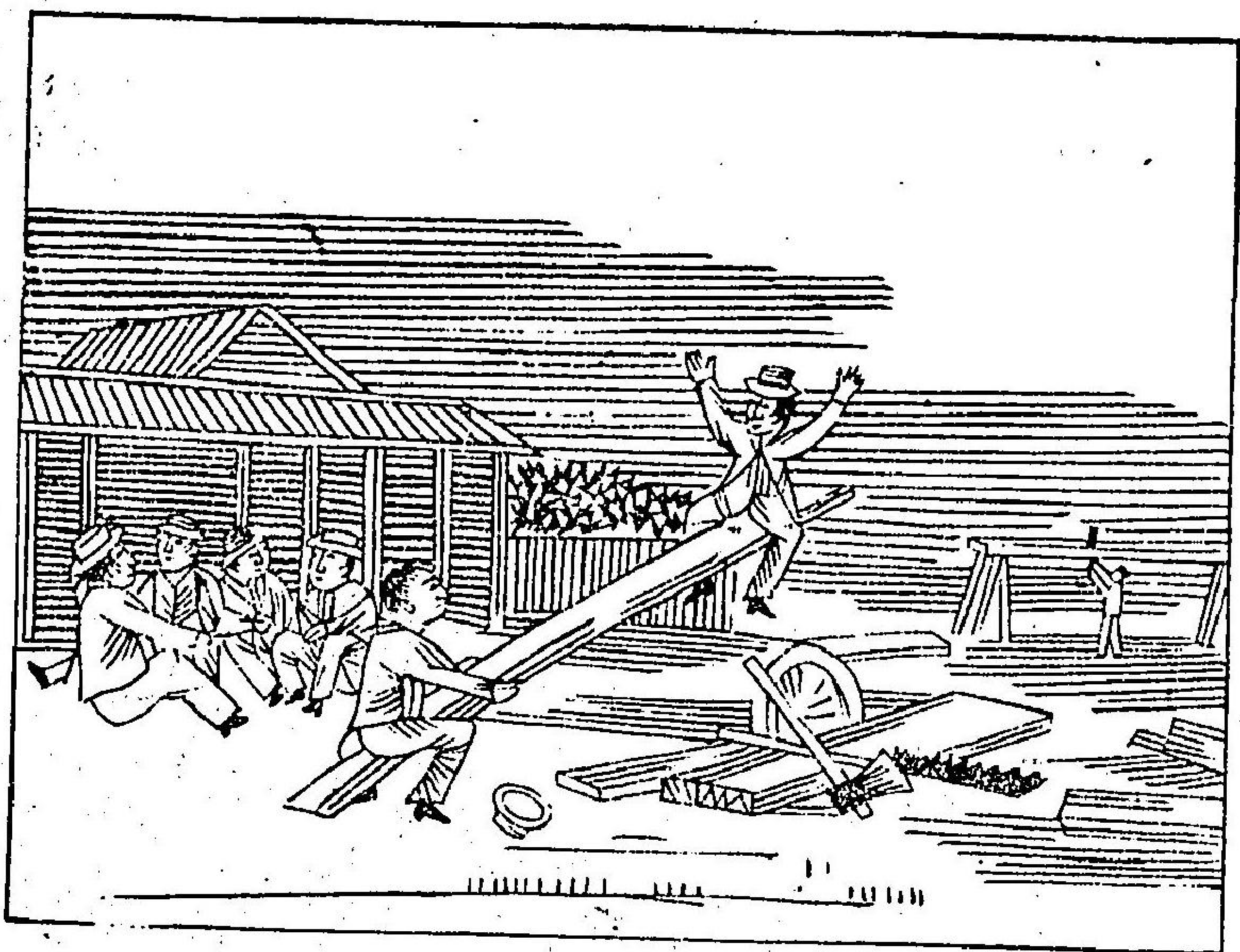
此馬の柔和ある馬ゆゑ、二人の小兒を、乗せて歩
 めり。○此馬を、走ると思ふふ、○此馬の、前の一足
 を、舉げて、あとの一足と、下きんとすると、見まじ、



走るよ、い、い、徐に歩
 むあり。○前の小兒へ、手
 綱と、兩手は、持たせど、
 も、其見ゆるへ、只右の手
 のみあり。○後の小兒へ、
 馬より、落つることと、恐
 る、ゆゑ、前の小兒を、
 抱きて、をさうり、

此處へ、工人の作事場あり。○數多の大人へ、作事
 と事とせり。○二人の小兒へ、此作事場へ、来り、板

一乗りて遊び戯き居き一人の小兒の高く上
 がり一人の低く下がり
 たり。○汝ハ小兒の傍に
 有る器を何ありと思ふ
 や。○こまの斧と鋸あり
 ○汝ハ此小兒等と善き
 小兒と思ふ。○作事場
 に来りて遊ぶの善き小
 兒ハ何らざるべし。○
 今ハ遊歩まじき時間と

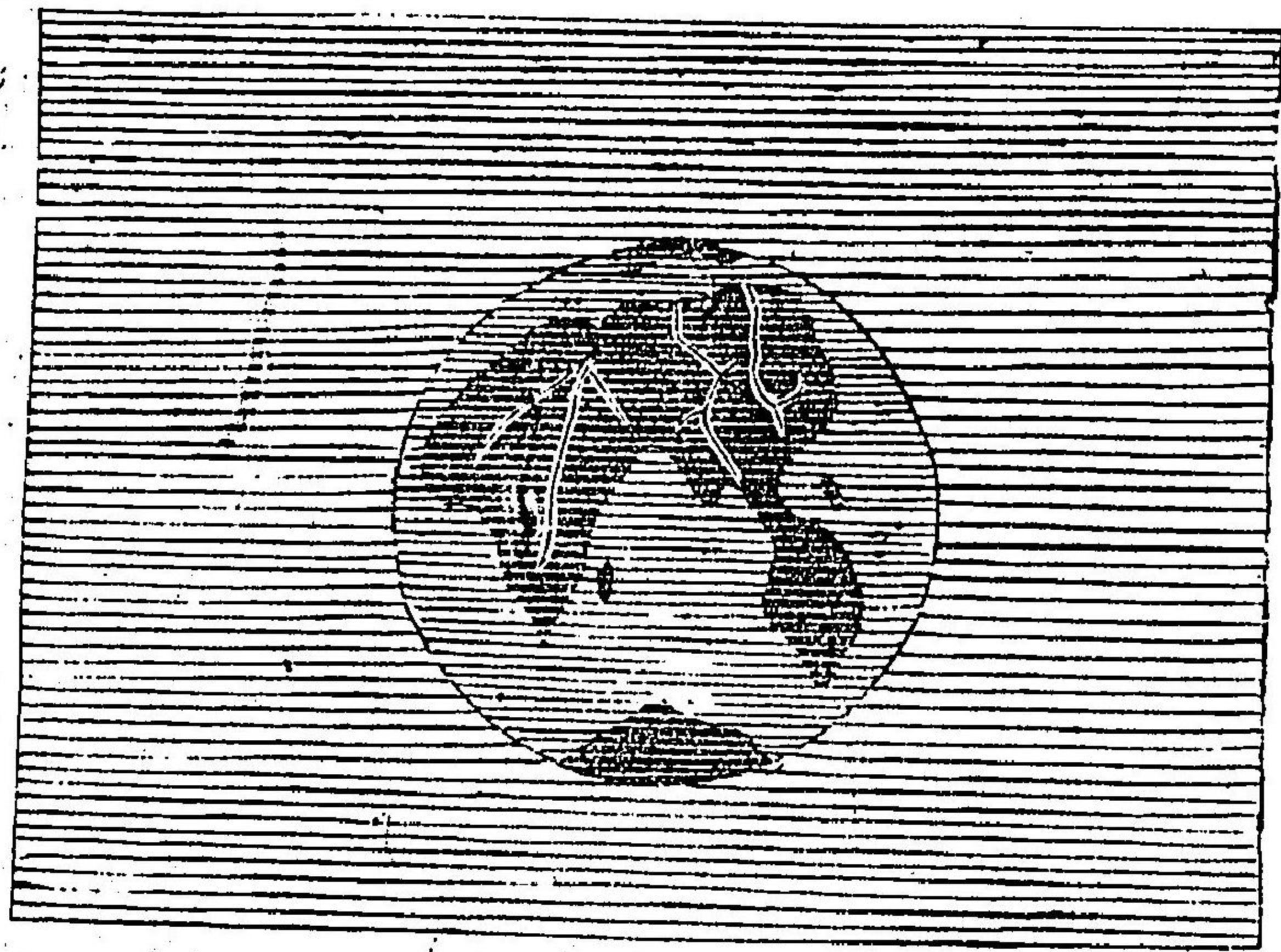


一見えん學問まじき時間あり。○學問まじき時
 間ハ作事場に来りて遊び戯き作事の妨をま
 する。○汝等ハ遊歩のときも作
 事場に来るべし。遊歩場も遊ぶべし。

第二

我等の住居する世界の平あるものなり。○實
 一圓くして球の如きものあり。故ハ世界と地球
 と同じ。○此世界の靜あるやうに覺ゆまじきも實
 一動くものなり。毎日一廻づつ。旋りて一年ハ
 太陽の周りを一旋りするものあり。○太陽ハ圓

きものよみて、世界は光と、
 熱とを、與ふるものあり、
 ○我等、晝は、太陽を見、
 ども、夜は、見ることなし、
 ○汝、夜の、太陽を見、
 とを得ざるは、何ゆゑな
 るぞ、知まらうや、○夜は、太
 陽の方よ、向をざるゆゑ
 に、見ることを得ざるな
 り、○月も、亦圓きものを



きども、太陽及地球の如く、大なるが、○月、原
 より、光なきものなきども、太陽の光と、受けて、始
 めて、輝くものあり、
 我等一同、草刈場よ、出
 来まらう、○小兒は、刈うた
 る草の上よ、坐し居て、草
 を刈るを觀ふ、○枯草は、
 柔なる物なれば、此上は、
 遊び戯まらう、宜しきな
 り、○草は、牛馬の食あり、

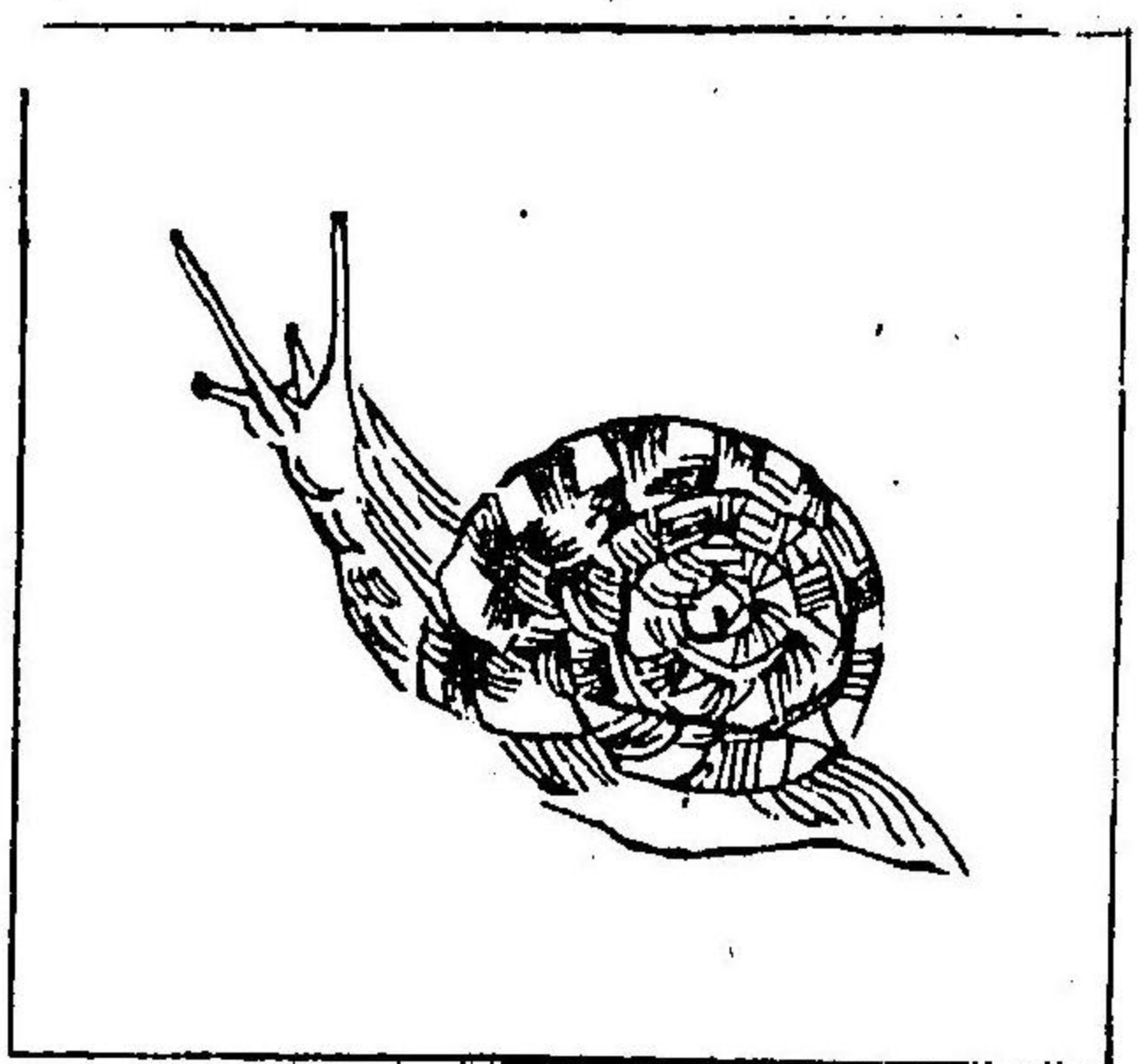


ゆきよ、牛馬を畜ふ家よ、夏の間よ刈りてこ
きと貯ふ。



狐の犬よ似たる獸よし、
頭平ふ鼻く耳く、尖うて
尾の甚長し。○此獸の穴の
中は住し、晝の隠きて出で
ば、夜よ入ると、穴より出で
て、田畠の傍で遊行は。○狐
の食を貪る獸よし、多く
雞の雛を食ひ、又好きて桑

の實櫻の實等々食ふ。○雞を捕ふまは穴を持ち
行きて、こまきと食ふ。○もし犬を見るときは、穴の
中よ逃げ入ると、出づることなし、是は穴よ入ら
ざれば、直よ犬よ噛み殺さるる。故あり。
蝸牛とつゝ蟲の足あきゆゑ、歩むこと能はず、



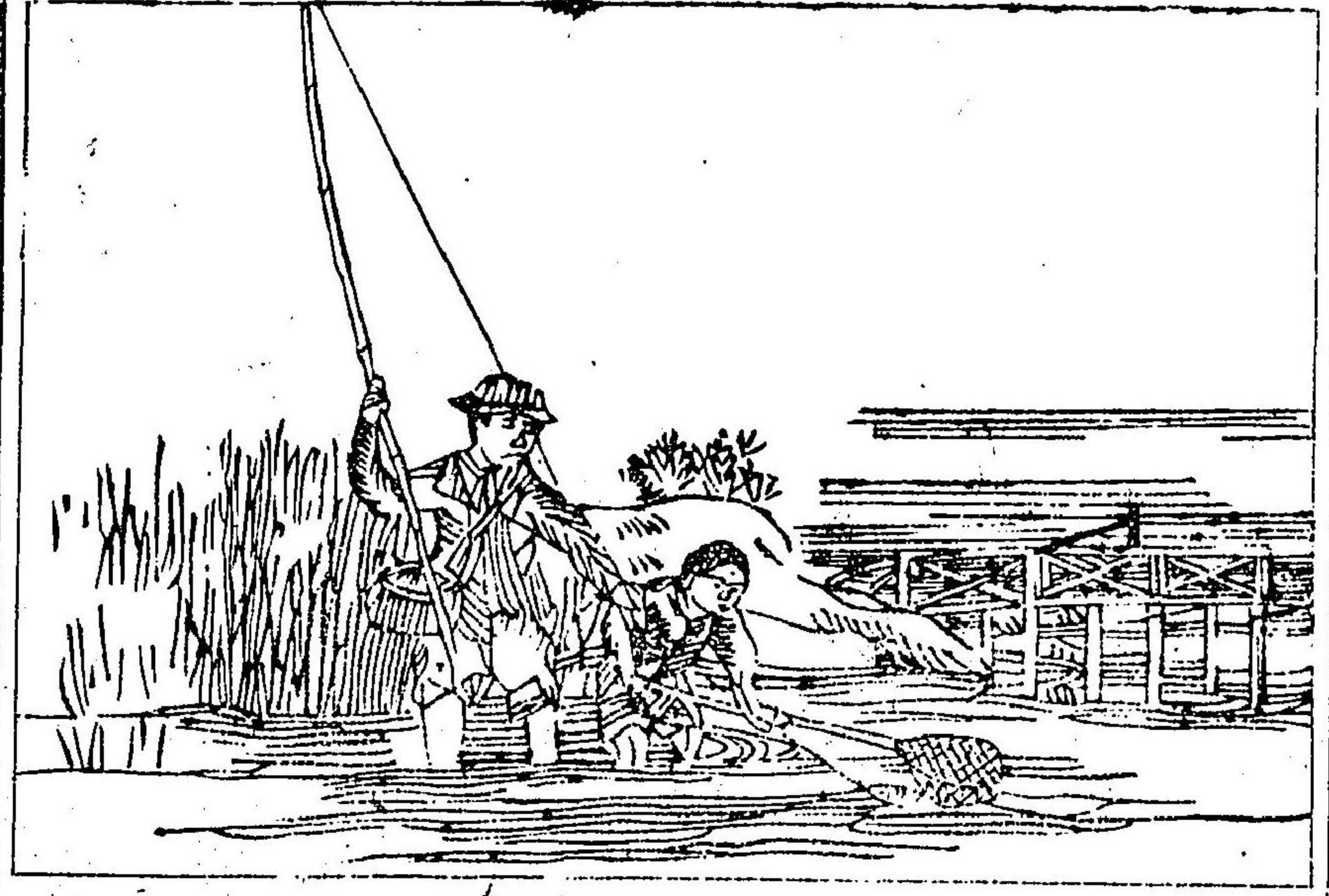
只匍匐するのみあり、
この蟲の背の上よ殻のりて、物
よ恐るると、まき、其中よ縮こ入
る。○蝸牛の動くとき、四本の
角よ出だは、其中二本の長き角

の先よ、目^キのり、短き角の下よ、口あり、○此蟲ハ冬
 ハ土の中よ伏し、春の至るを待ちて、出づるなり
 汝ハ、此處よ、男兒と、女兒
 と、驢馬の在るを見たり
 や、○男兒ハ、驢馬よ乘ら
 んと云、○何如よ、汝ハ、乗
 り易かるべしと思ふ
 ○驢馬ハ、小き馬あれ
 ども、小兒ハ、乗る難
 るべし、○遙の向ひよ、荷車あり、○汝ハ、此荷車と



何ありと思ふや、○遠き處よ、能く見分くるこ
 と、能く見れども、島の小路よ、あるを見よ、穀物
 を載せたる車あるべし、
 此圖よ、画きたるものハ、何ありや、○大人と、小兒
 と、二人水中よ立てり、○此等ハ、何をあはれや、○此
 人々ハ、魚を漁するなり、大人の釣りたる魚ハ、大
 あるゆゑよ、強く曳のべ、糸の切せんことを、恐
 て、遠く曳き擧げざるあり、○男兒の持ちたるも
 のも、何ありと思ふや、○そよ、網の類よ、たま
 とつものあり、○男兒ハ、此網を以て、魚を捕へ

んとけ。○大人の脇へ懸
けたら、何あるぞ。○こ
しの蓋の向る籠より、其
中へ魚を入るゝあり。○
此人の立ちたる處ハ深
しと思ふ。○人の膝ま
で、水は入らざるや、見え
ば、甚深うゝ。○もし深水
ふも、二人とも立つこと
能わざるべし。○此河



架したる橋より、汝ハ此橋ハ何より造りたる
と思ふぞ。○橋よハ木と石と鐵との別ハ何ぞ
も、こまへ木より造りたる橋なり。

汝ハ此男兒を何歳許お
りと思ふや。○此男兒ハ
十歳以上あり。○此男兒
ハ善き人ありと思ふ。○
否、學問をかせ、又遊
歩をもあまじくして、休
むるゆゑに、怠りものと



知らるるあり。○此男兒は何も倚りて何を見るや。○此男兒の倚りたるもの、大なる石の柱あり。又此男兒は何をも見ず、只天をあらがむるあり。○總て、小兒は勉むべき時をりり、遊ぶべき時をりり。○此小兒の如く、常は勉強をなさざると、きい成長の後人、勝ることを得ざるあり。爰も、又急情の小兒あり。○彼の學校へ行くこと云ひし、何ゆゑも學校へ行くべしと、途中は遊び居るや。○未學校へ行くべき時刻、来らばや。○學校まで、既に誓古始まつたまへば、此小兒も、

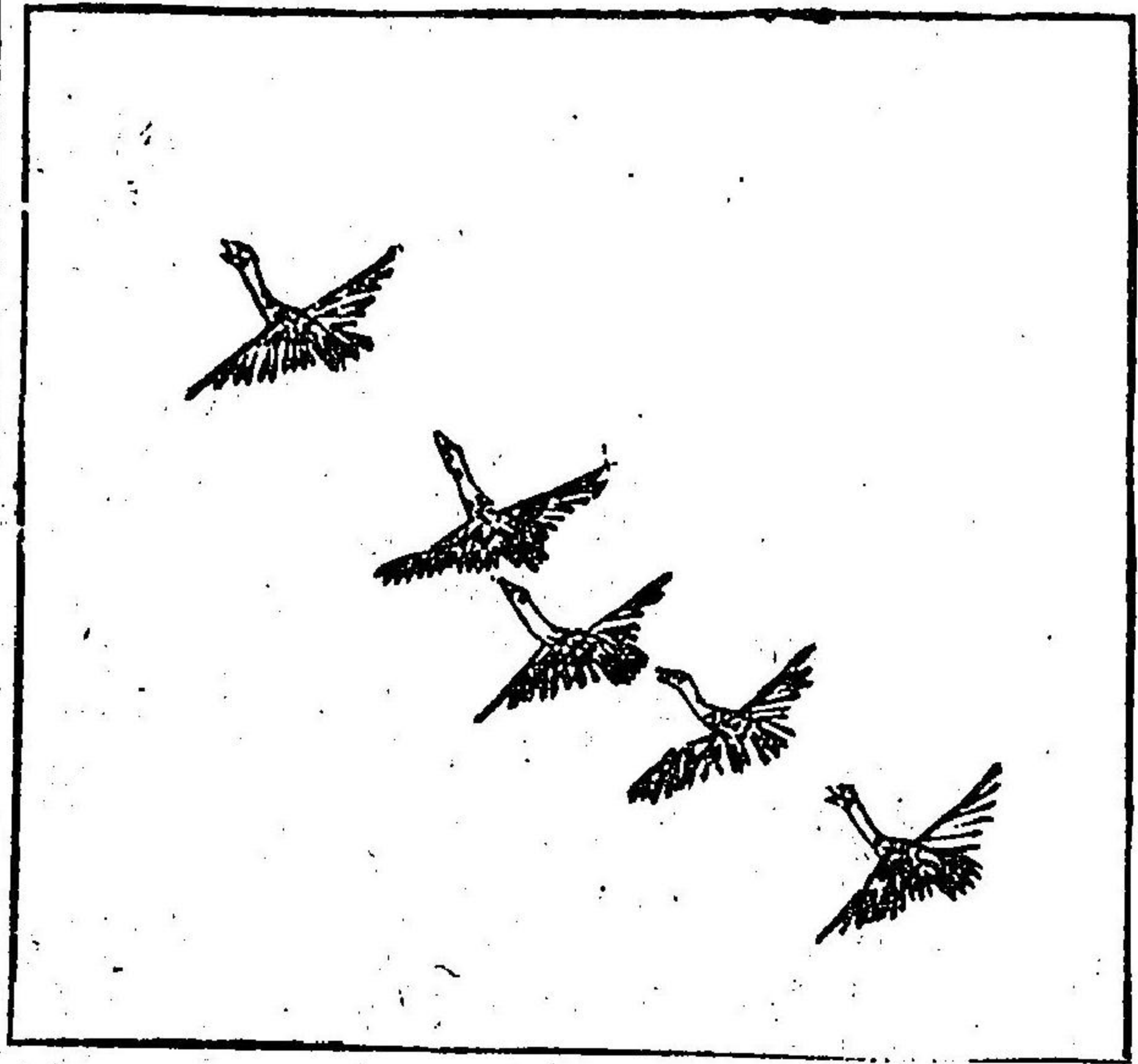
く行くべき時刻あり。○然らば、何ゆゑ爰は止まら居るや。○彼の犬も乗る、又他の意りもの、遊ばんと思へばあり。○彼は學校へ行くものあり。○其書と、何處に置きたるや。○書と、自分の家、忘れたるあり。○さき、學校へ行きたりとも、誓古をらてとを得ば。○善き小兒の書を、大切にあつて、學校へ行



くを好む。昔古の時間米とて決りて途中を遊
び居ることなく、學校までも能く勉強して學ぶ
ゆゑ、其等級屢進むなり。

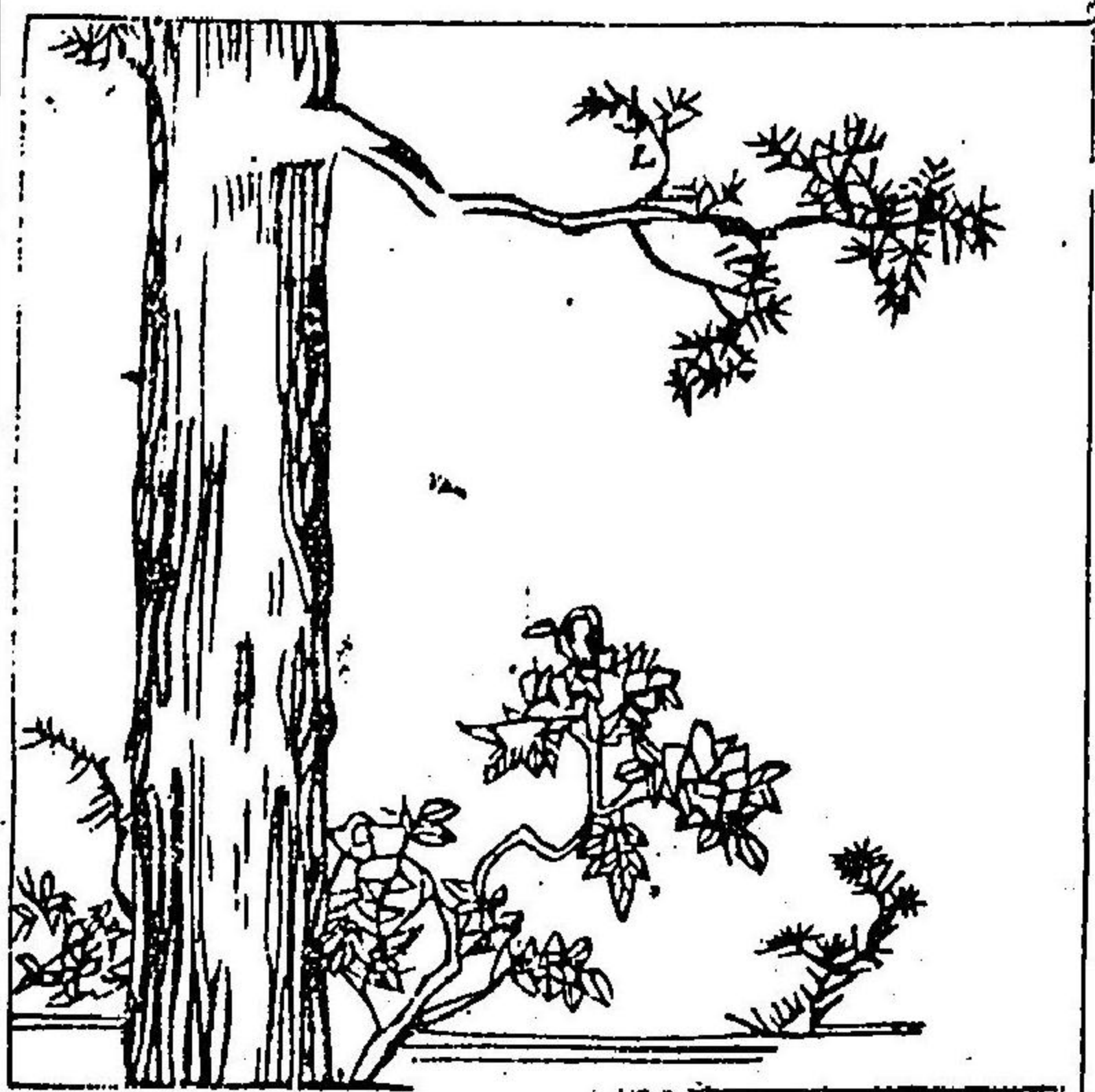
第三

雁の列をふして行く圖
らん。○見ゆべし、一羽の
雁導をふせば、其他の雁
へこれに隨ひて飛行く
を。○是は何處を行くや
○或は水邊を行きて、葦



の間は息み、或は田を下りて、食物を求めんとは
るあり。

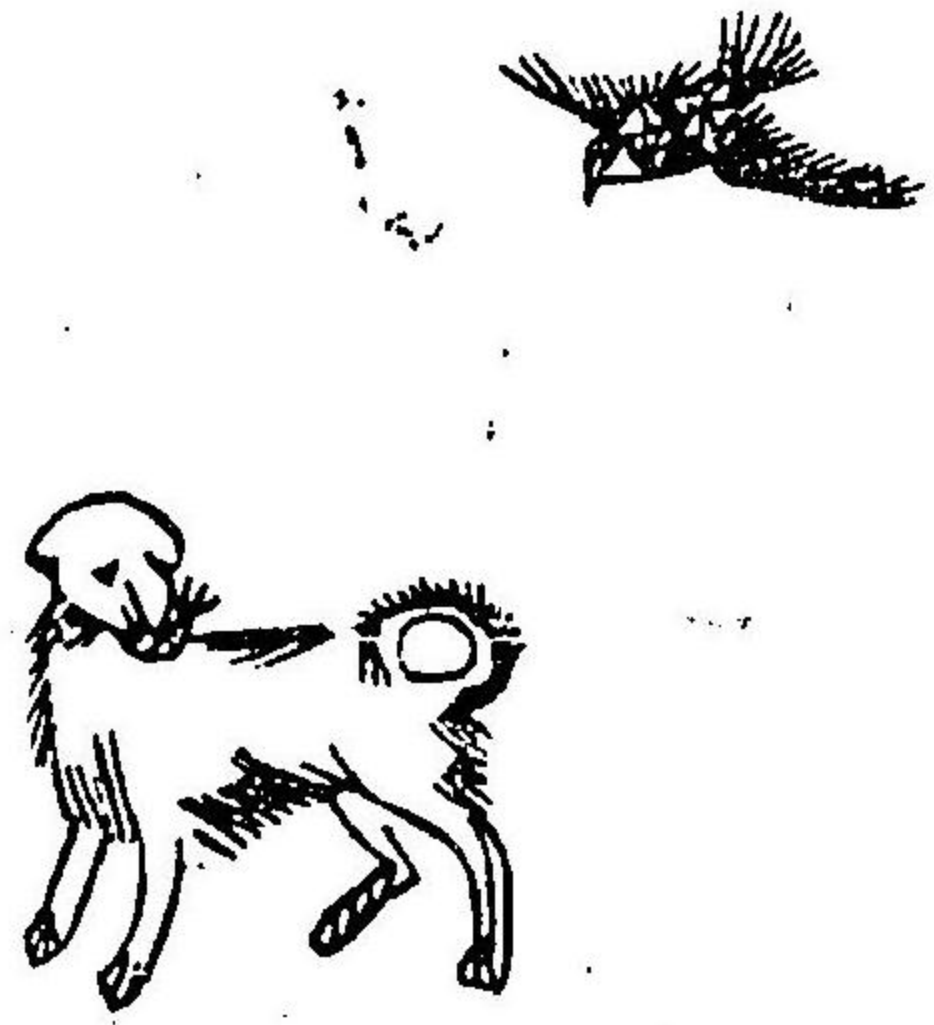
此鳥は、冬は北より南へ来り、春は至るべし、又南よ
り北へ歸る、故は夏は此地に居ることあり。



地は生ひ出づる物、草と
木とりりて、木は灌木と、喬
木とりり、○草は其幹葉一
年限りて、枯るものな
り、灌木は高一丈は出でざ
り、雖其幹は枯も、さるもの

あり。○喬木といふ成長して、高大に至るものぞ云ふ。○此三の者を合せて、植物と云ふ。植物の生と保ちて、能く成長し、又死して、枯朽るものあるも、人の如く、物を思ふ根の食物と、地下より吸ひ、葉の能く呼吸せしむるも、鳥獸の如く、動く

ことあり。鳥の二つの足と、二つの翼ありて、多くは空中に翔る。又水上は住むものも、つり。○獸類は四足ありて、膚は長き毛あり

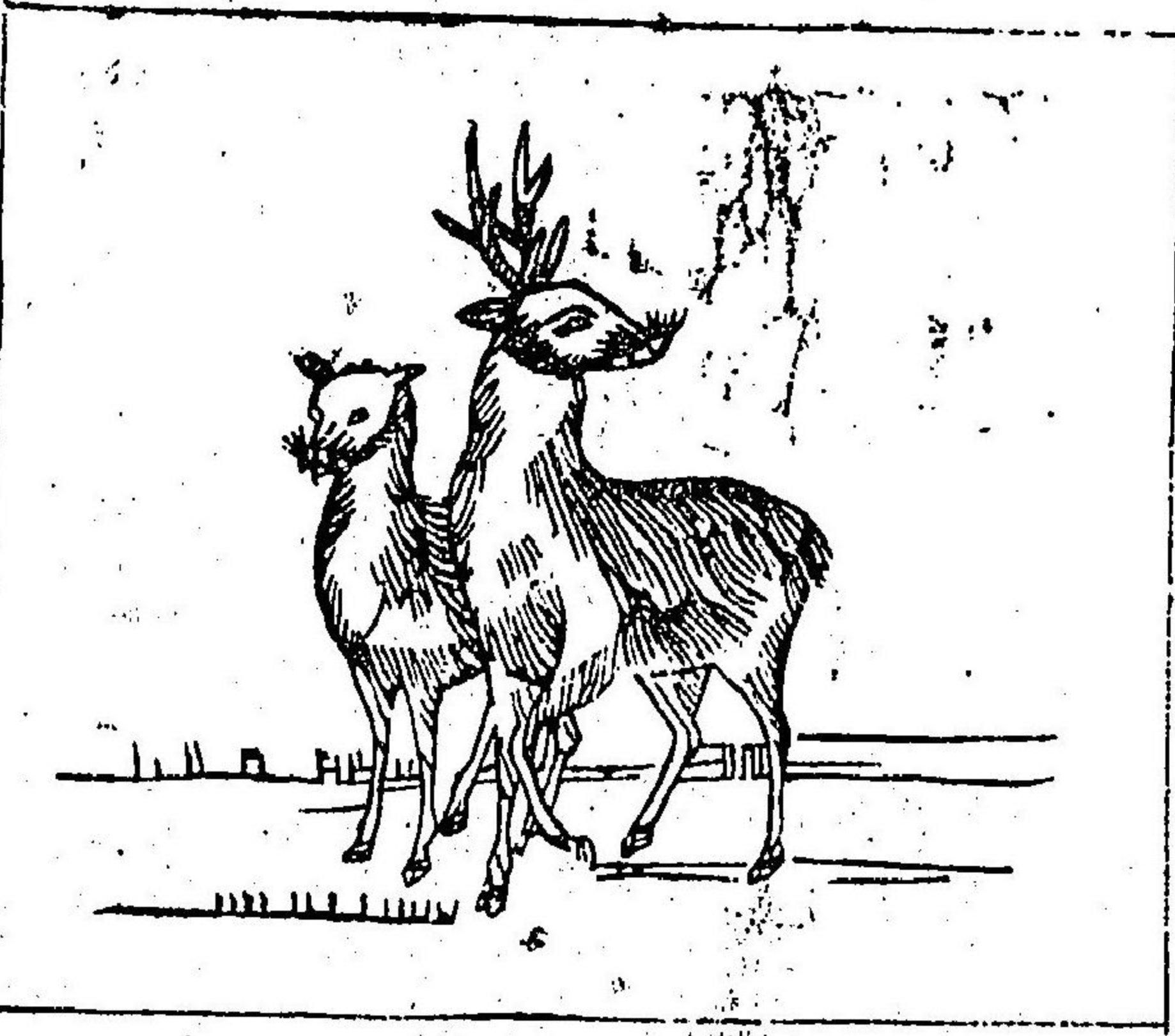


り。○此鳥と獸といふ身體と、意は従ひて、動くせども、人の如く、言ふこと能はず。汝の實の草木の種類と知さるや。○其莢と見て、豌豆と蠶豆とぞ知る。穂の形と見て、稻と麥とを知るべし。

草木といふ皆種子、つり豌豆、蠶豆の莢の中は在りて、梨、李、橙の肉の中は在り。○種子の食物とあるもの、稻、麥、豆、黍、粟の類あり、肉の食



物とあるもの、梅、桃、梨、李、蜜柑の類なり。
 草木の皆種子より生じ、濕ひたる土の中より種子
 と置くとき、漸く膨脹して、遂に破裂し、其所よ
 り、芽と根とを生ざるあり。
 鹿は山林に、住まる獸なり。
 この獸の牡は、枝と生じ
 たる角あり、牝は、角あり
 其色の茶褐色にして、白き
 斑あり。
 鹿の長き足ありて、走ること

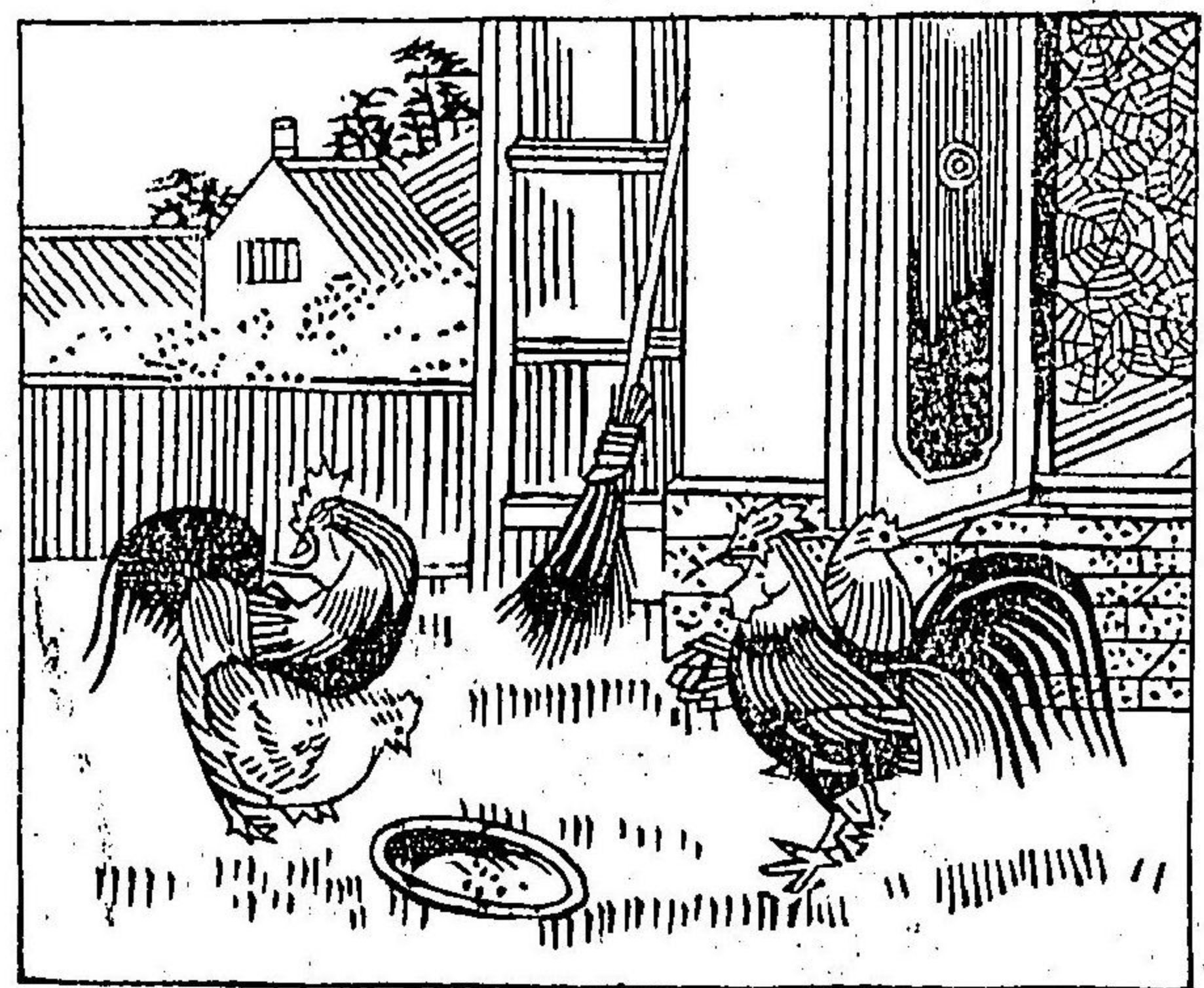


と、甚速あり。○常は、草木の葉を食し、或は、田野
 に来りて、穀物と食することあり。此獸の角は、堅
 くして、器を造るべく、又其皮は、席と多し。べし。
 此男兒は、惡しき心のものである。汝は、この男兒の
 持てる帽の中より、ある物を見たるか。○これ、柿
 の實あり。○此柿の實は、垣を踰えて、隣家より、盗
 る取もたらあり。○今此男兒、柿の實を、盗り取ら、垣
 を踰えて、出でんとする所を、數多の犬ども、これ
 を見て、男兒を追ひつけ、一匹の犬、男兒の裾を咬
 つたり、よりて、男兒は、垣を踰えて去ることを得ば、

此時盗きたる柿の實を捨て
てある犬へ、裾を放つべけ
まども、此男兒へ、これと捨
つること能はば、○他人の
物と盗むへ、決して為まじ



きことなり、善き小兒へ、自分の物より、けしき
取ることなし、○常は、行狀の正しきもの、幸多
く、正し、うらぎるもの、幸を得ること能はば、ま
い、汝等、他人のものを見て、何如あるものありと
も、必らず、得んことと、欲することふかき、



爰は、四箇の雞と、穀倉とあり、○汝が、見る所にて
い、これの、とありや、○否、家の後、松あり、垣あり、寄
せて、立てたる、筈あり、雞の飲水と、入きたる、水鉢
あり、○汝へ、此鉢は、水ありと
思ふや、○必水ありあるべし、
○何を以て、水のありと知
る、○此鉢へ、少し傾きて、一
邊の縁高く出でたるを以て、水
のありと知ると、水へ、傾きた
る鉢の中も、決して、斜

傾くことある、其表面へ必一様は平ありものなり。○汝へ、雞の水を飲むと見しや、雞へ牛馬の如く、首を下げて、飲むこと能はず、ゆゑは一滴口に入ると、首を擧げて、咽ふ、飲み下だきあり。此處へ、何如ある所ありや。○此處へ、穀倉の傍なるべし、雞へ、巢の上らんとして、梯子を傳へ行くあり。○梯子よ、横木あり、これ何ありや、此横木へ、梯子の級あり。

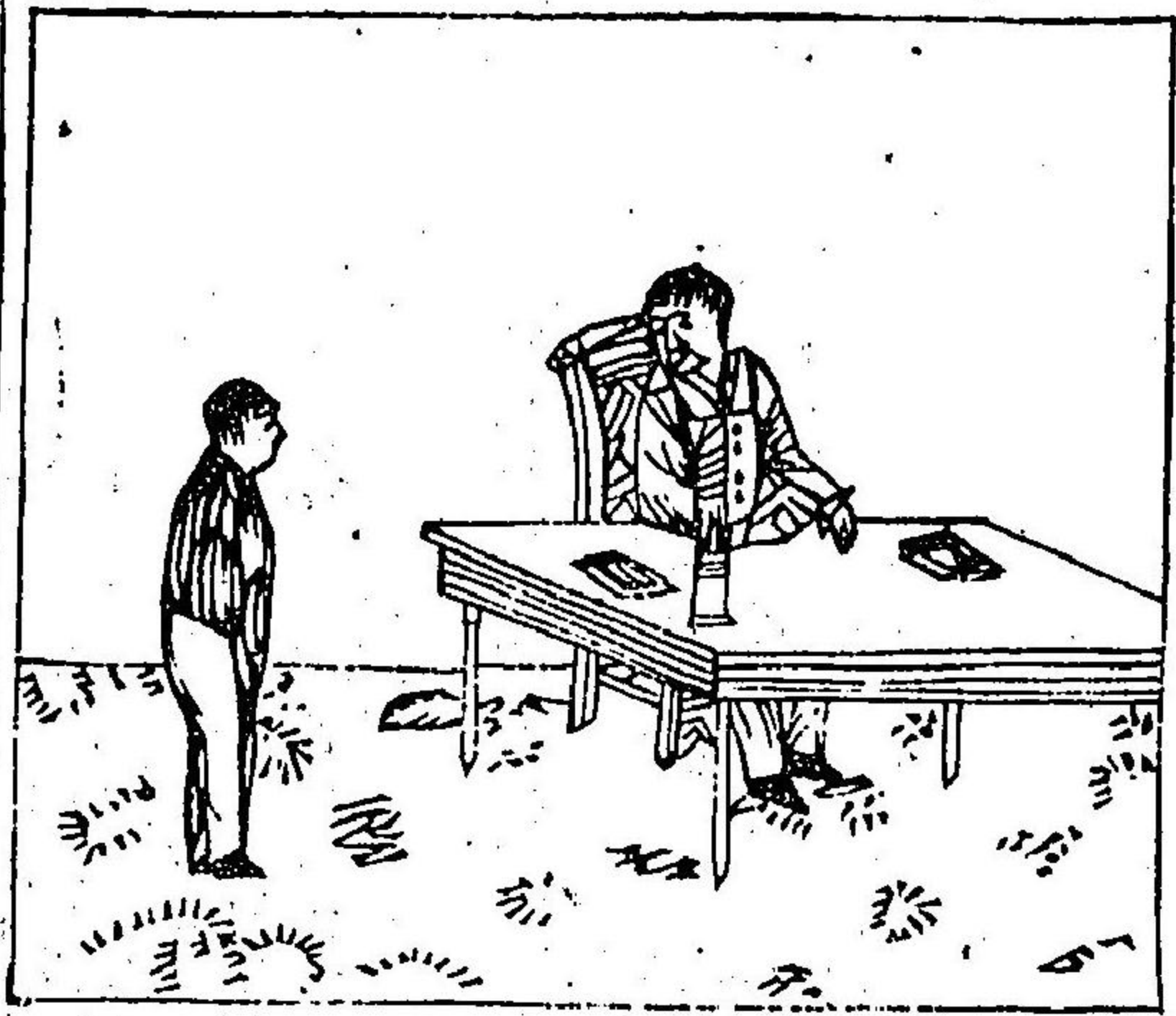


汝へ、雞の巢と見たるか。○巢へ、隠して、椀の裏より、ゆるゆゑ、見ることを得ば。

汝、此處よ来と、汝昨日、失ひたる所の書籍を、尋ね得たりや。○否、未尋ね得ば。○汝へ、文庫の中を、捜し見ばや。○幾度も、捜し見たと、其處より、何ぞ。○汝、今一度、尋ね見よ、書籍を、けと、學ぶこと、能はず。

又、汝よ、筆、けりや。○筆へ、命、ぜりきたる如く、文庫の上よ、置きたり。○汝へ、筆の用るかたを、知らるや。○否、未用るか、と、知らば。○汝、今、其筆を、取来

も、汝も筆の用ゐる方と、教ふべし筆の用ゐかたを、
 知らざると、字を習ふこと能はず。
 汝は今日、學校へ行きたりや。
 ○學校へ行きて、終日學びて、先
 刻歸り来たり。○然らば、座よ
 就きて、復讀せよ、凡て學びた
 る所と、常よ、復讀して、決し
 て、忘るべからず。



第四

岸の上よ、二人の少年ありて、三艘の船の岸よ着

くと、見居たり。○三艘共よ、帆と、十分よ張くと、櫓
 の上よ、旗と、揚げたる、船あり。

一人の少年云ふ、我が朋友
 へ、去年先の船よ乗りて、外
 國よ、往きたりしが、日と、數
 ふと、其出立せし日より、
 今日まで、殆一年よ及びて、
 歸り来たり。
 彼の兩親へ、日々、彼の歸る



と待たり。○今日無事ある顔と見ることと得て、
何許の喜べし。人また彼男も、父母の恙なき
顔と見べ定めて、大よ喜ぶべし。

彼船へ堅固ある船とて、風雨よ逢ふとも、破損あ
く、無難よ、歸り来とべ、船中の人々へ皆此船と忝
く思ふあるべし。

人々の外國よ行くへ、學問或へ貿易とありて、我
國の利益と、あまんことと、欲するがゆゑあり。

總て鳥へ、嘴の長きものと、短きものとあり。○此
嘴とて、食物と啄む。○鳥よ、穀物と、食まるもの

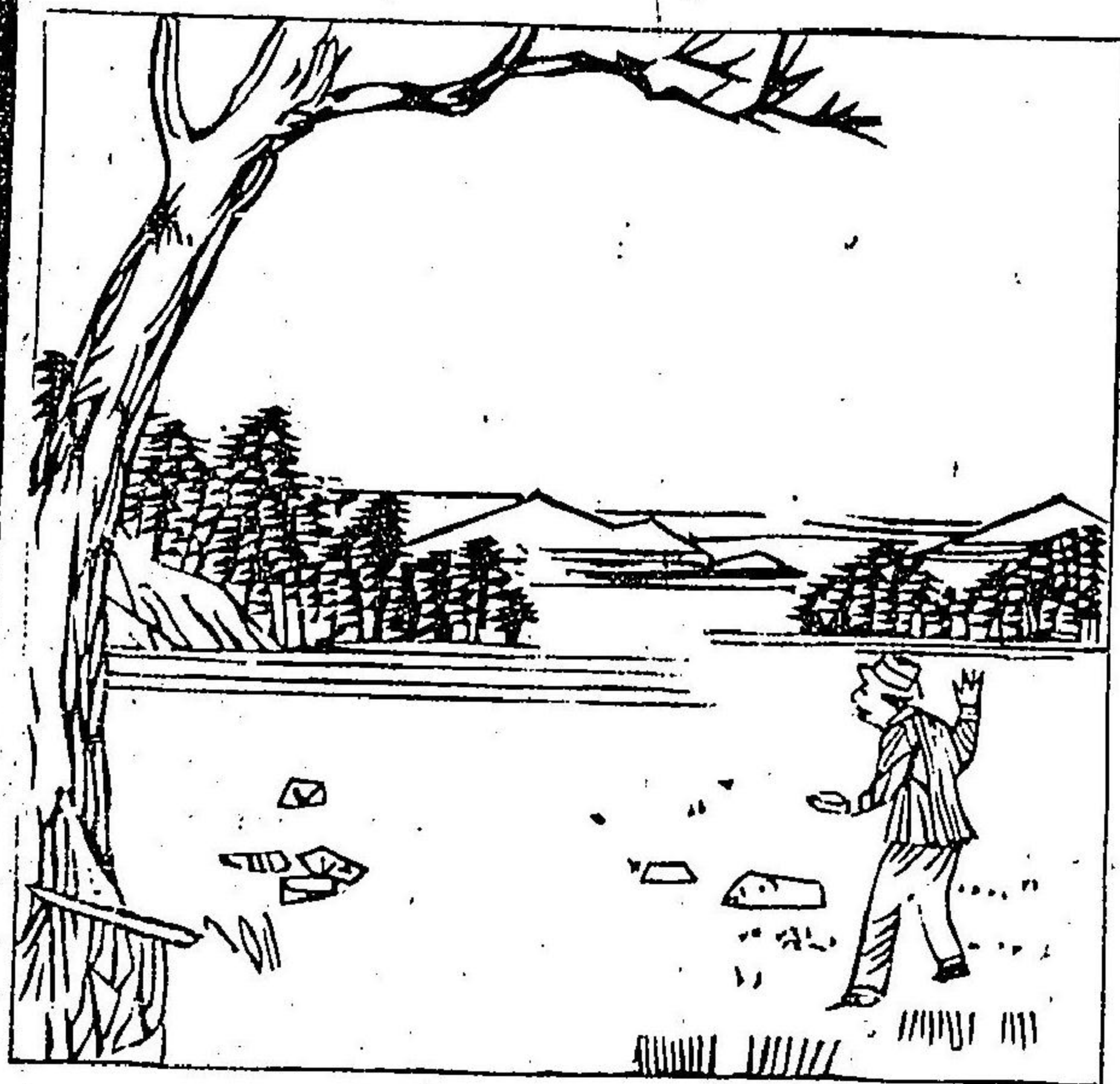


と、魚又へ蟲と食するものと
あり。○鳥の目へ面の兩側よ
ありゆゑ、一時よ、兩方と見る
ことと、得るあり。○林中よ遊
ぶ鳥と、林禽とつひ、水上よ遊
ぶ鳥を、水禽とつひ。○鳥の足
よ、四指ありて、三指は前、一
指は後よあり、然まとも、啄木鳥類も、前後各二指
ありて、能く大木よ上下し、樹皮の中よ、住む蟲と、
搜し食ひ。

此人い驚きたる風情あり、是は何故ありや、○何故あることと知らば、○此人い、久しき以前より遠方より行きて、今我郷に歸り来ると、昔住みたりし家の變りたるを見て、驚けるあり、

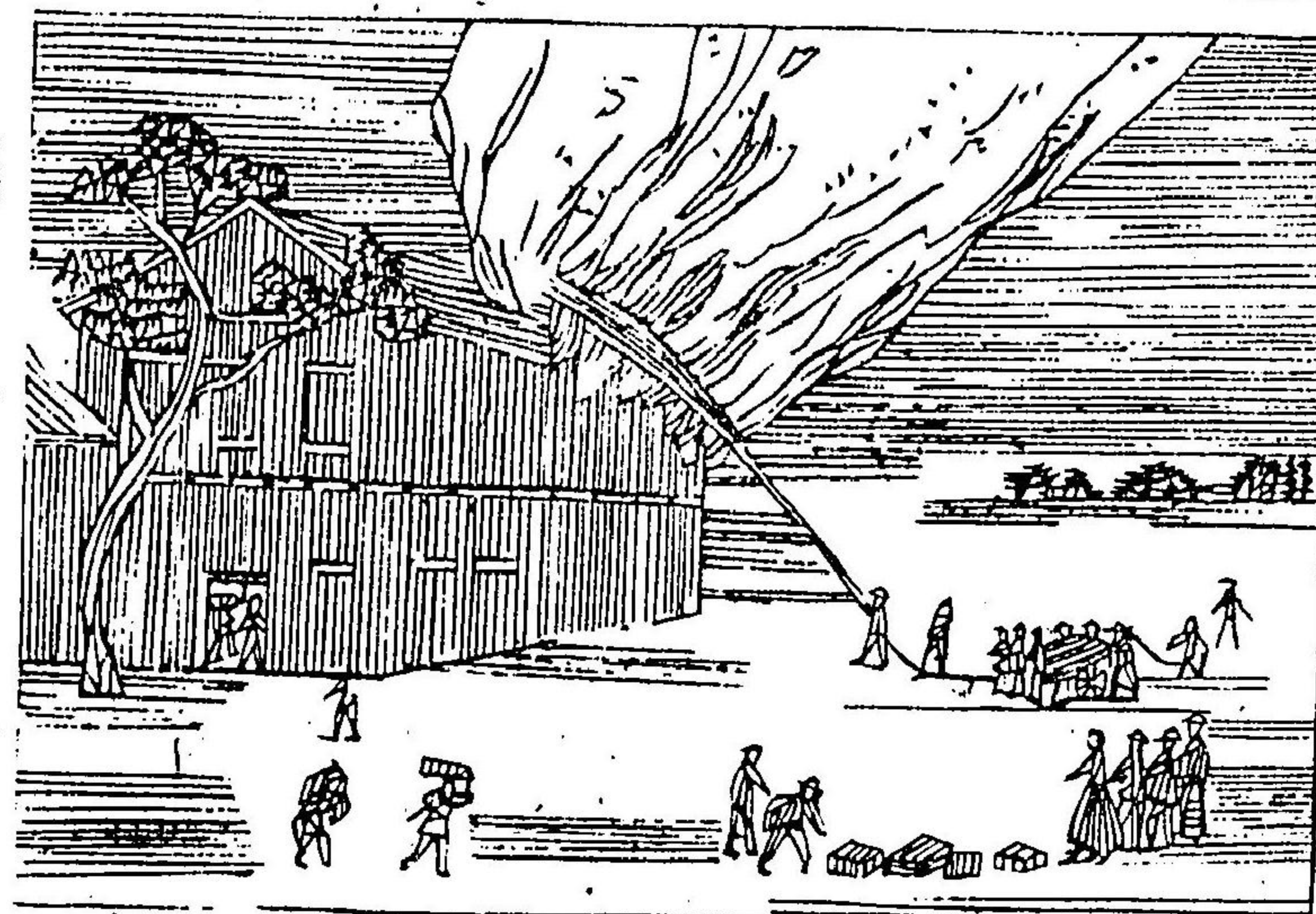
さて此家の斯く變りたる所以と話し聞かうべし

此人の家を出でたる後、近隣より一人の小兒あり



しが此小兒い、至りて惡きものにて、ある日戯し、紙を焼きて遊べる、其火忽家の障子に燃えつき、終に此家まで焼け失せたり、○さきば、今此人我家に歸り来りても、未妻子の行きたる所をも、知ること能はば、ゆゑに悲み歎くあり、

今此人の家の焼けたる時の状と、圖して示さん、○火と、烟との家の窓より、吹出づる所を見よ、○又家は懸けたる梯子あり、○梯子より上りて火を消さんとする人あり、○多くの人も、唧筒より頻に水を注げり、



此圖は、画きたるは、柔和ある牛とて、此小兒は

然きども、火猶消えざりて、
家終に焼け落ちたるゆゑ、
この家の人々も、皆逃げ去
きるあり、

さきば、小兒は、火を弄ふべ
のゝび、一度過つ時の家と
も、倉をも失ひ、甚しきに至
りて、其身をも、失ふこと、
あるものなり、



隨ひ、徐々歩めり、此小兒は、今牧場は、牛を曳き行
く所あり。○此小兒は、何ゆゑも、歩まふが、書を
讀むや、此小兒は、其性極めて賢く、常に學問を
ことと好めども、家貧しき
ゆゑ、學校に入ることを能
くせしめて、日々、牧場を行
き、然きども、學問の志深
きは、因りて、道を行く間も、
書を讀むなり、又、牧場に至
りても、休む間、書を見ど

るこころあり。○此の如き小兒は他日必人よまき
りて貴き人とあるべし。

惡しき小兒は日々學校へ行くと雖能く勉強せ
ざりて遊ぶことのを好むゆゑ後よの愚ある
者くありて、貧賤よ其身と終るべし。

雲雀巢や麥島の間は造りて雛を育てたり。○麥
の已は熟して刈るべき時は至りたるよ、雛は未
自由よ飛ぶこと能まば一日親鳥食を求めんと
て飛び去り暮よ及びて歸り来まば雛告げて、今
日此島主ふる農夫其子と共に来りて明日の近

隣の人を雇ひて、此麥を刈り取らんとして、歸まら
と云ふ親鳥聞きて、彼近隣の人を雇はんとなら

ば、未急よの刈取るべから
ば、明日の此處よならとも、
恐るよよ足らばとつひ其
翌日も亦食を求めんとて、
飛び去りたり。

かくて、日の暮る、比親鳥
歸り来まば、雛又告げて、今
日も農夫其子と共に来りしが、近隣の人も同ト



く、己が作りたる、麥を刈るに暇ならんば、明日
 の、朋友親族を頼みて、刈り取らんとて、歸まらんと
 云ふ親鳥の、彼尚他人を頼むの心なれば、明日も、
 憂ふるも、足らばと、云へり、

さて、其翌日、親鳥例の如く、飛去りて、歸り来るよ、
 雛の云ふ、今日ハ、農夫父子来りて、かく麥の熟せ
 るうへハ、最早他人の力也、待つよ暇なれば、明日
 ハ、自刈り取るべしとて、歸まらんと云へり、

親鳥のこれと聞きて、然らハ我等も、疾く此處を、
 立ち去るべし、農夫が、自刈り取らんと、決したる

うへハ、必日と延ばさば、うらばといへうとぞ
 親鳥の言實は、理なり、他人は依りて、事と成さん
 とする者ハ、恐るゝよ、足らざれども、自為さんと
 決する時ハ、須臾も、猶豫せざる、べし、けさあり、さ
 せば、人々、皆自為さんことと志し、他人の力と
 ば、頼むべからば、

第五

今、花園よ、善き種子と蒔きて、善き植物と、生ぜし
 め、美しき花を開くや、ゆんともるよ、園中よ、蔓と
 る雑草と、抜き取らざらば、ときハ、蒔きたる種子と、

害しく、生長せざること能まざらむ

今此處は花園の雑草を抜き去る圖を出だして
以てこれを示さん、

地はもとよきものふきど
も善き種子を蒔くれば
よき植物が生じ、美しき花
を、開くこと能まば、又芽既
は萌出でたるとき、能く
培養せざれば、生長せざること能まば、雑草は、こきよ反



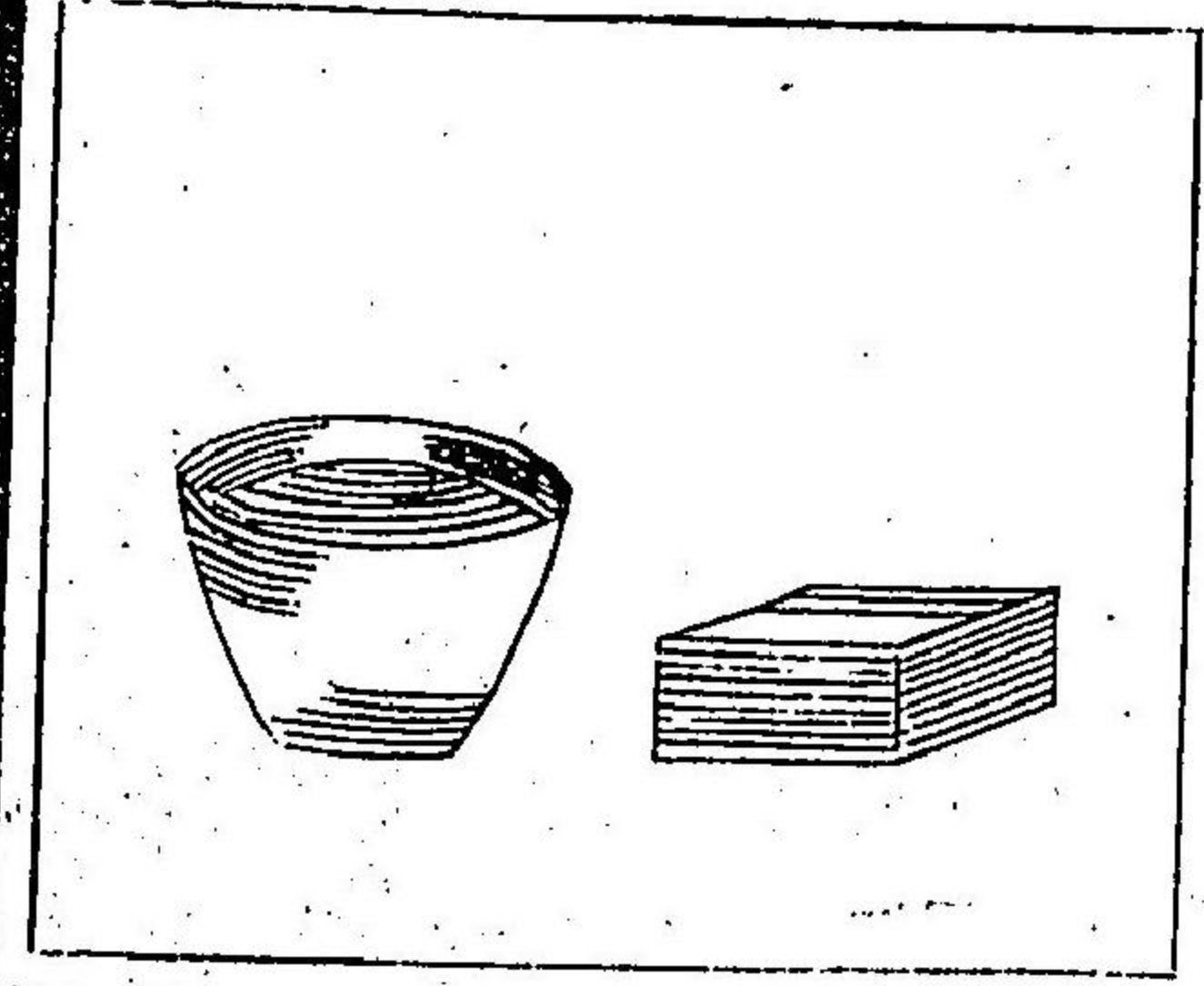
して、種子を蒔くれば、自生長し、こきよを抜き去らざれば、大に蔓りて、善き植物を害し、終はこきを枯らし盡はば、至るべし、

人の心は、もと善きものあれば、善き教を聞き、これに従えざれば、善き人と成り難し、教師の教へ、即我心は、種子を蒔くと同じ故、よき心を用ゐて、これを育ひ、能く成長せしむべし、然まども、不正の心の生じ易きこと、雑草の如くふきば、心よ蒔きたる、善き種子を、害まば、こきよの、勉めて、こきよを抜き去らば、いづるべし、こきよを抜き

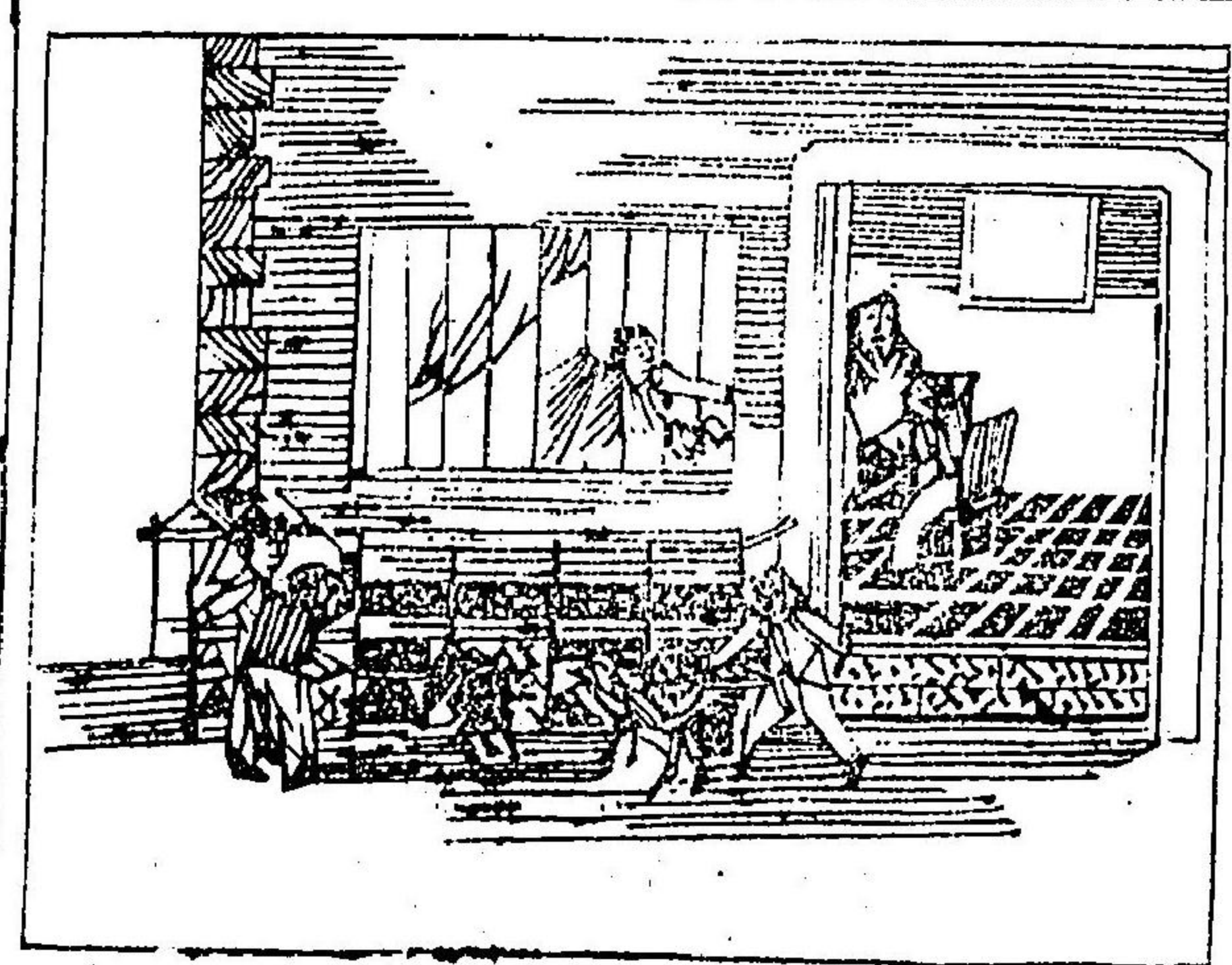
き去ることと、怠りて成長せしむるときは、終
い、中々萌せる、良心を害して、これを枯らし盡
よ至るべし、

汝等、善き人と、あつんことと欲せば、此人の、雑草
と拔き去るが如く、勉めて不正の心と、拔き去る
べし、

爰も、圓き器と、四角ある器とよ、入
きたる水なり、もと水は、同じけき
ども、其器の形より、由りて、或圓く、或
四角ある、形とあるなり、



人も、小兒の時に、此水の如し、善き友と交りて、善
きことを見聞けば、善き人とあり、又、悪しき友と
交りて、悪しきことのみを、見聞けば、悪しき人と
あるなり、



家の内外も、數多の小兒あり、
て、其遊ぶさまの、各異あり、
見らべし、家の内なる小兒は、
日々學校にて、學びたる所を、
家へ歸りて、其友と、互に問答
して、こまを樂とし、此等へ、他

日必賢き人とあむべし、又外は集まり遊へる小
 兒の學校よも、行りざる者と見えて、犬と噛合
 せ、棒や打揮り、無益の遊のよとせらる。此等の後
 日必愚あるものにあむべし、汝等賢き人とあら
 んと思ふが、能く心を用ゐて、常は善き友と交り、
 必惡しき小兒と遊ぶべからず。
 汝等事の正しうござるや、知るときは、いたく他
 日利あることと思ふとも、決して行ふべからず。
 又惡しき業をば、假よも心よ、行もんことを、思ふ
 べからず、若しよ、行もんことを、思ふときは、縦令

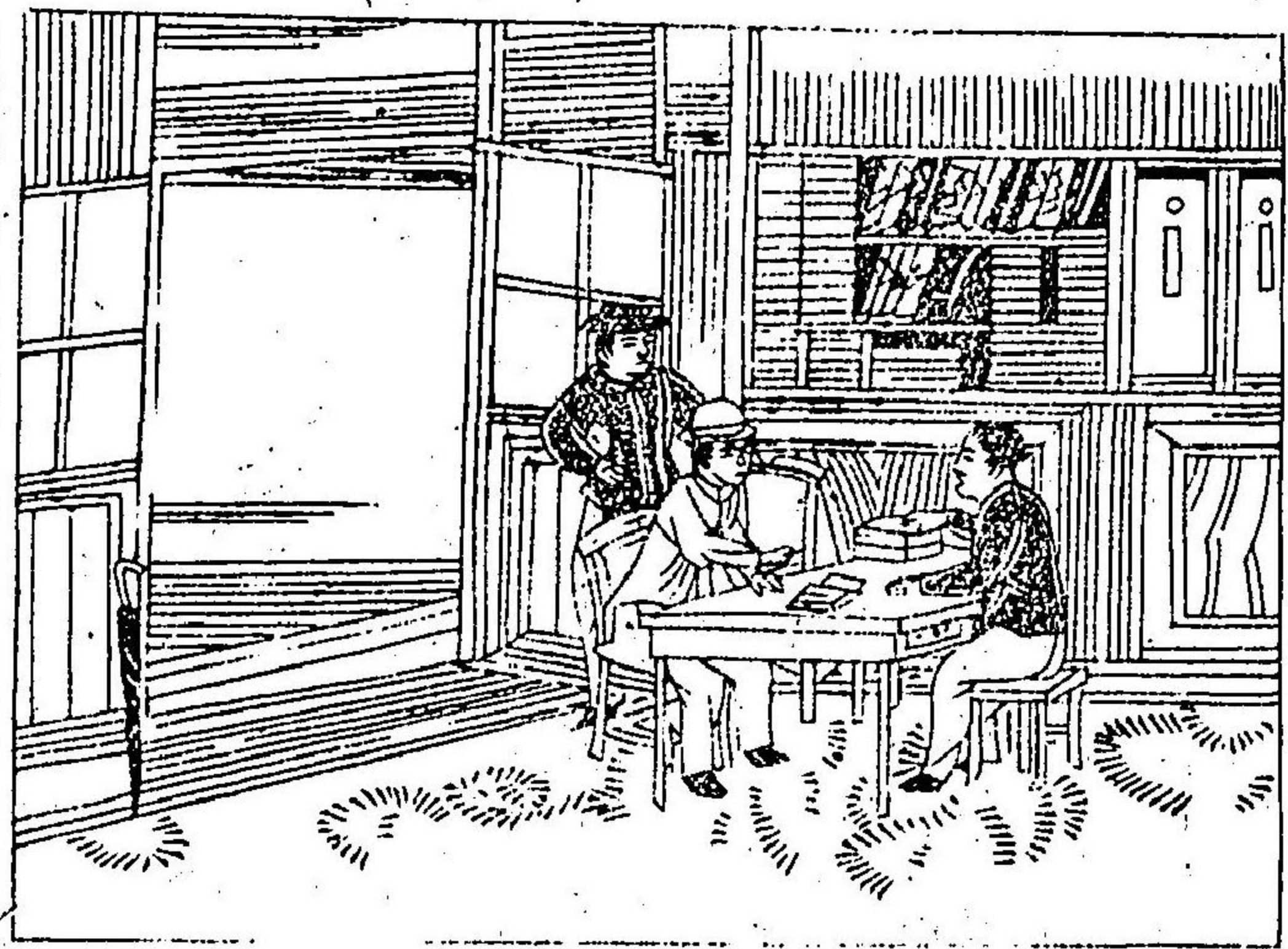
事よ、い、出さざるも、既よ、行ひたるよ、同じと知る
 べし。

凡て惡事の虚言より、始まるものあり、さよ、暫
 其身よ、利益ありとも、決して、虚言をば、
 言を以て、得たる利益へ、他人の物と、盗みたるよ、
 同じく、終よ、其身の害とあるべし。
 ひとり、一人の男兒ありて、毎は狼来ると、狼来と
 り、誰り出で、救ひ給へと、大に呼びて、途を走ま
 り、これへ、真よ、狼の来ると、い、他人の出
 来りて、救ちんと、まると、まよ、欺き得たりとて、大

よ、其人を笑ふを以て戯とまらあり、
 斯くまらること、度々ありしが、何ら日、真よ、狼来
 て、此男兒と、食をんとし、
 男兒は、大よ呼びて、狼来
 まう、救ひ給へといへど
 も、誰も亦例の虚言ある
 べしとて、こまを救ふも
 のふりしゆ、終よ狼
 のためよ、噬み殺された
 り、故よ平生戯よも、虚言



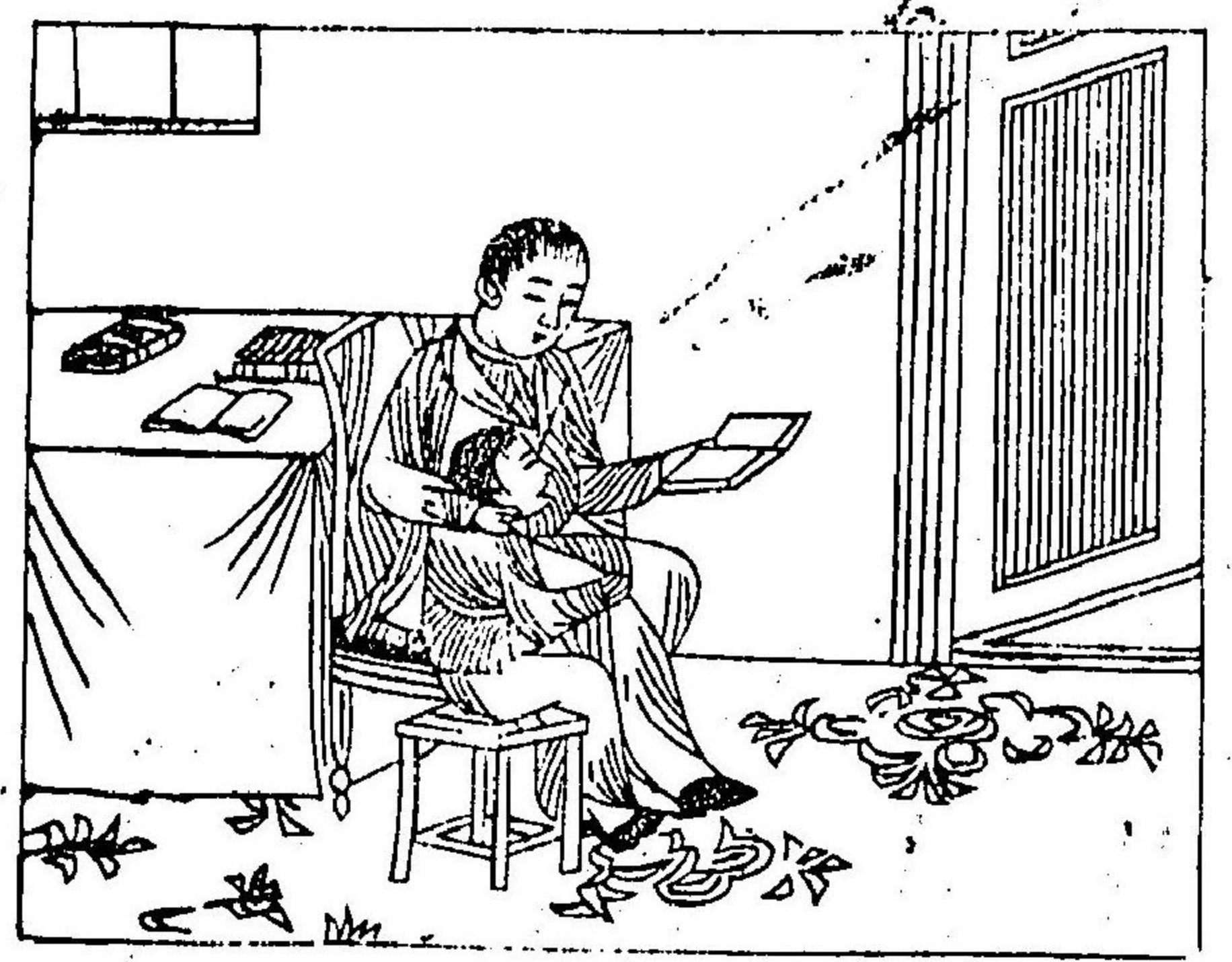
と以て、人を欺くもの、適、眞實のことを、話さ
 も、信とあはさるもの、何れ、常、慎むべきこと
 ありげや
 此處を、何如ある家ありと、
 思ふぞ、○こまの、書肆あり、
 爰よ、三人の男あり、帽を戴
 きたる、二人の者、書籍を、
 買をんがためよ、此處よ、来
 るるなり、一人、既よ、一冊
 の書を、購ひ得て、去らんと



及一人の机上の書の價と定め居るあり、

今此二人の書籍を買ふは何の為ありや家歸
うてこれと理會し己の知識を増さんときき
あり、書あけそむ、智識を増さんとときき
まこと、國の利益や興きこと能ふ故、志あ
る者へ有用の書と、金と惜まばうて、ことと購
ふあり、

此圖の男は手と持つる書と讀みて、其義と小兒
と語り聞かしむる所あり。○汝この小兒は能く
心と用めて、其話と聞くと思ふら。○此小兒は心



と用めて、其話と聞くと見え
て、此男の語ることを深く考
ふるさまあり、思ふは、今聞く
所へ、此書の中の尤大切なる、
箇條あるべし。○凡て、教と人
は受る者へ決して、倦怠の心
と、生もづつ、倦怠の心を、

生むるときは直よ、其顔色は見へる、ゆゑ、教
ふる者も亦これと知りて、懇よ、教訓ますることあ
し、されば、教を受る者へ皆此小兒の如く、心を用

るて其話と能く考ふべきことなり。

第六

汝ハ猫の兒也、愛するなり、又犬の兒也、愛するか。○
我ハ猫よても、犬よても、其遊
び戯るゝ所也、見らるゝこと也、好
めり。

總て、獸類も、稚き時ハ小兒の
如く、遊び戯るゝこと也、好む
ものあり、中にも、猫の兒ハ繩
又ハ鞠を弄びて、能く戯る遊ぶあり。○然るども、



獸類も、年老ゆきば、遊び戯るゝことを好まば、人よ
し、年長けたる後まで、遊び戯るゝハ、取づべき
こと也、何れにや。○さきば、老たる猫ハ、其兒の戯
る遊ぶを見らるゝことを好めども、其身ハ、觸るゝこ
とをば、喜ばざるなり。○老人も、小兒の遊ぶを見
らるゝこと、好めども、其身ハ、觸るゝことをば、喜ば
ざるものゆゑ、小兒ハ遊び戯るゝとも、老人の身
ハ、觸るゝ又ハ、其椅子机あぐらハ、決して、手を著く
べからず。

此小兒ハ學校より、善き生徒あり。○汝ハ、此小兒

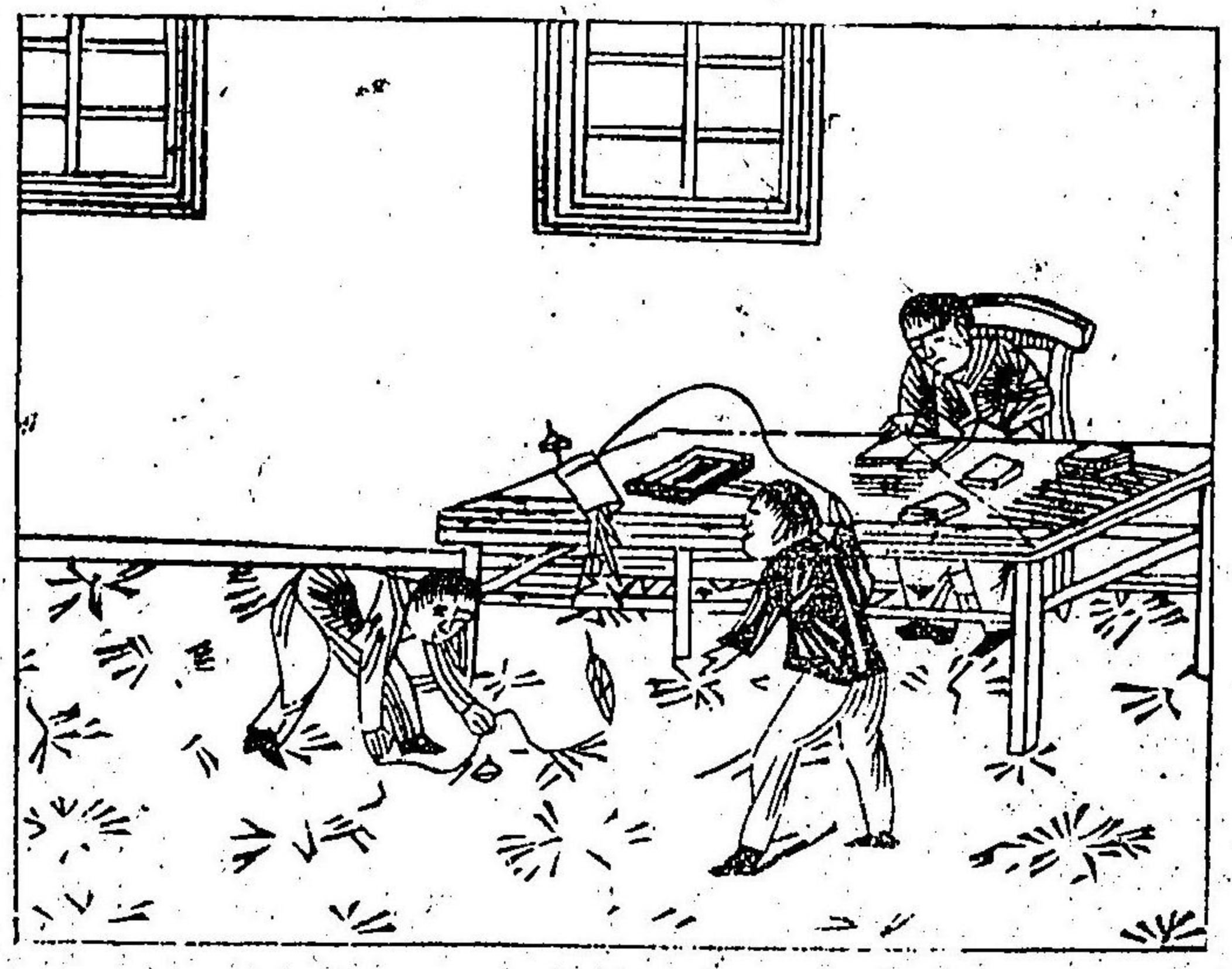


の學校より、書を讀むを聞きた
りや、○此頃始めて、こきと聞き
たり

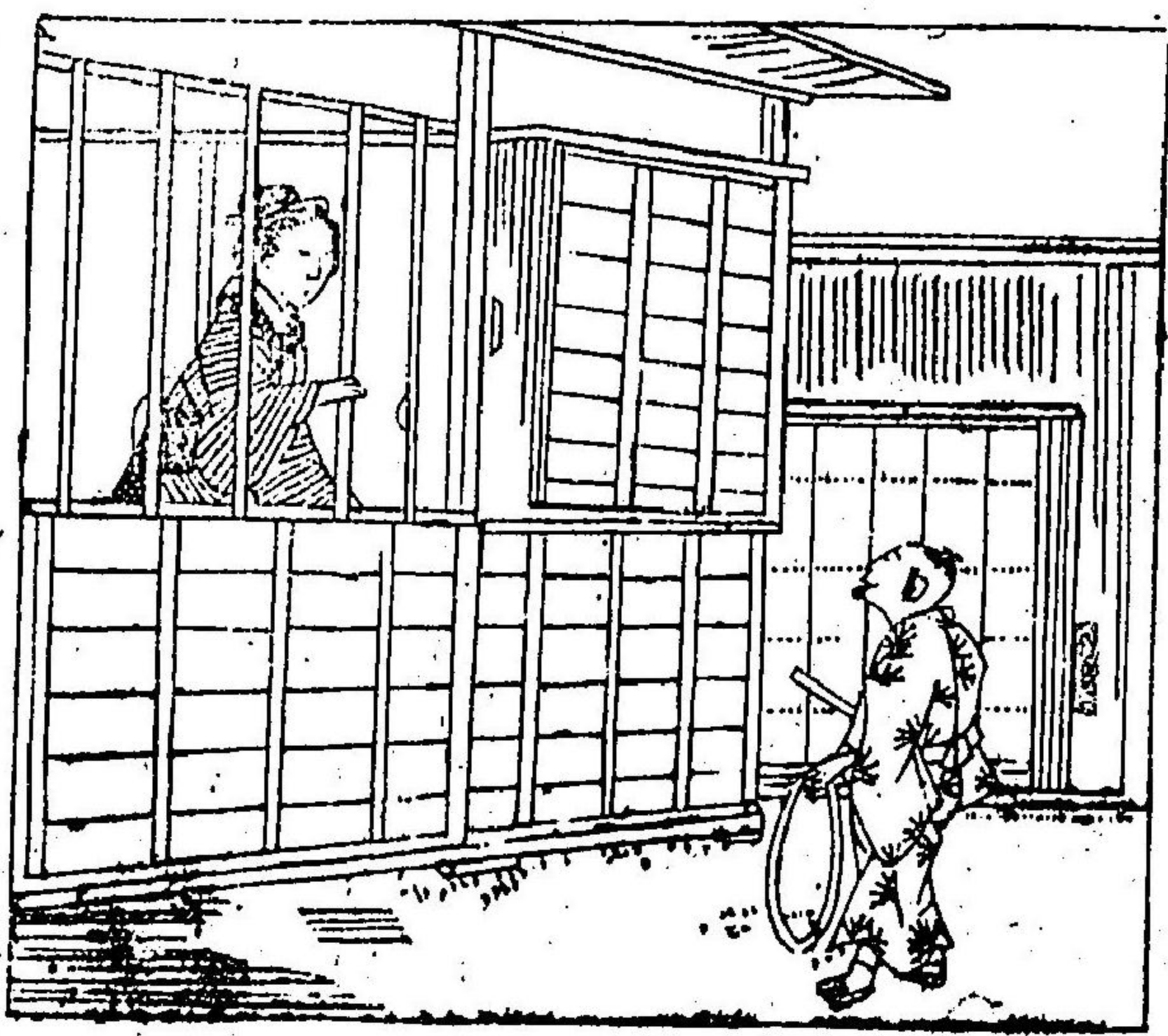
此小兒ハ何の書と讀ちるや、○
彼の小學讀本と讀ちり、○其讀
む所の小學讀本の何の巻あり
や、○彼の巻の三を讀ちり、我ハこの小兒の如く、
能く書と讀むものを好む、能く書と讀むものハ、
後ハ善き人とあまきハなり、○若學問もあま、智
慧もあま、いハめで、善き人とあま、ことを得べ

ま、善き人とあま、ことを得ざれば、他人ハ愛せら
るゝこともなく、又貴いものゝこともあ

爰ハ三人の小兒あり、一人
ハ机に向ひて、書と讀み、二
人ハ獨樂と廻りて、遊べ
り、獨樂と廻りて、跳り旋
るゆゑ、机は觸きて、其上
の筆筒を倒せり、書と讀
居たら、小兒の心ハ、此二
人の戯を遊ぶと何如ハ騷



ざん思ひ居るあらん定めて此小兒等の他處
 よ行かんことや願ふまじべし
 總て人の自好まじることば人も亦好まじ
 ものと思ひ遊び戯るゝにも決して人の妨とあ
 るべきことをあはれづ又自好むことへ人
 も亦好むものし知りてこれをまづ人の譲るべ
 しとまじ古き教へよも己の欲せざる所へ人よ
 施さることあはれといひ又已達せんと欲せば人
 ぞ達せしめよとも云へり
 爰は遊歩又出でんとまゐる小兒あり○汝は此小



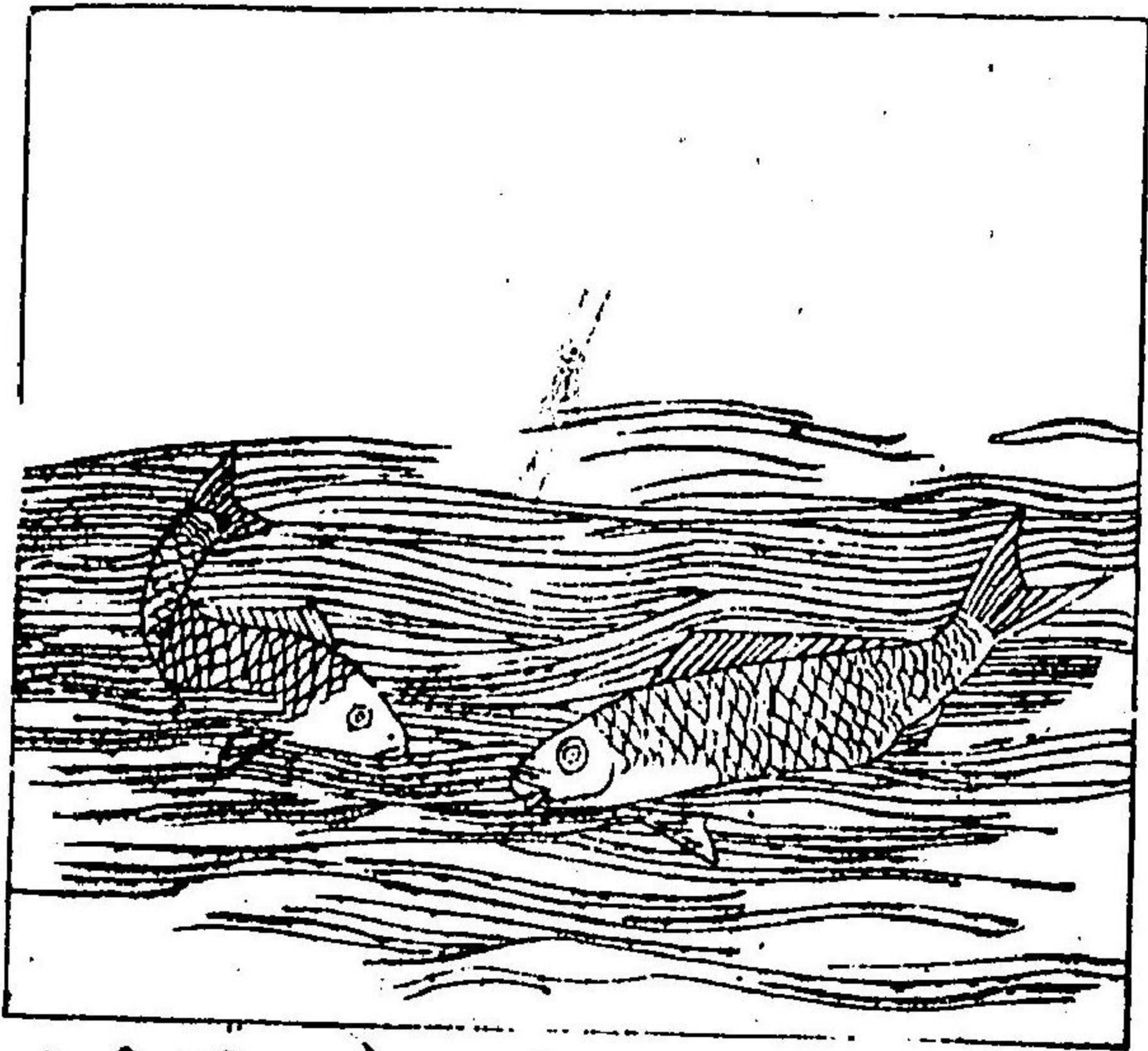
兒の善きと惡しきことを知
 まりや○我の本其人とあ
 りを知らばと雖今遊歩よ
 出でんとするよ其母よ呼
 び返されて速に歸り来り
 否む色なきを見まじ善き
 ものあまじも其母よ
 呼び返されてこそを厭ふ心の色よ見とるゝ
 必善きものよあまじ知るべし
 此小兒は未學校より入らざるか○此小兒は五六

鳥言ス
 文音
 五九
 一〇

歳は過ぎば見ゆきべ、未學校は入らざるべし。我は此小兒の學校に入りて、遊歩の事を好まば、勉めて書や讀み、成長の後、其善き人たると失はざらんことを願ふあり。

此圖は、画けるは、何物ありや。○こまへ魚あり、汝は、生きてる魚を見たるべし。○常よりれと見る。

汝は、漁せしことあるべし。何を以て漁せしや。○釣糸を以て魚を釣しことあり、魚は水中に住むものゆゑ、水を離るゝとき、



其命を保つこと能ふ。○魚は、鰭と尾ありて、自由な水中で游泳し、又全身は鱗に覆われ、鱗はきつり、其鱗も魚よりて、大小を異なせり。

汝は、魚の水中にありるときも、其目へよく物を見るときも、思ふ。○然る、水中でもよく物を見るなり。○何を以て水中でも、能く物を見るときぞ、知まらや。○も、水中でも、物を見るとき、

能へざる時、必岩石に衝き當りて頭を傷くべし、然らざるものへ、よく物を見ることと得きべなり。

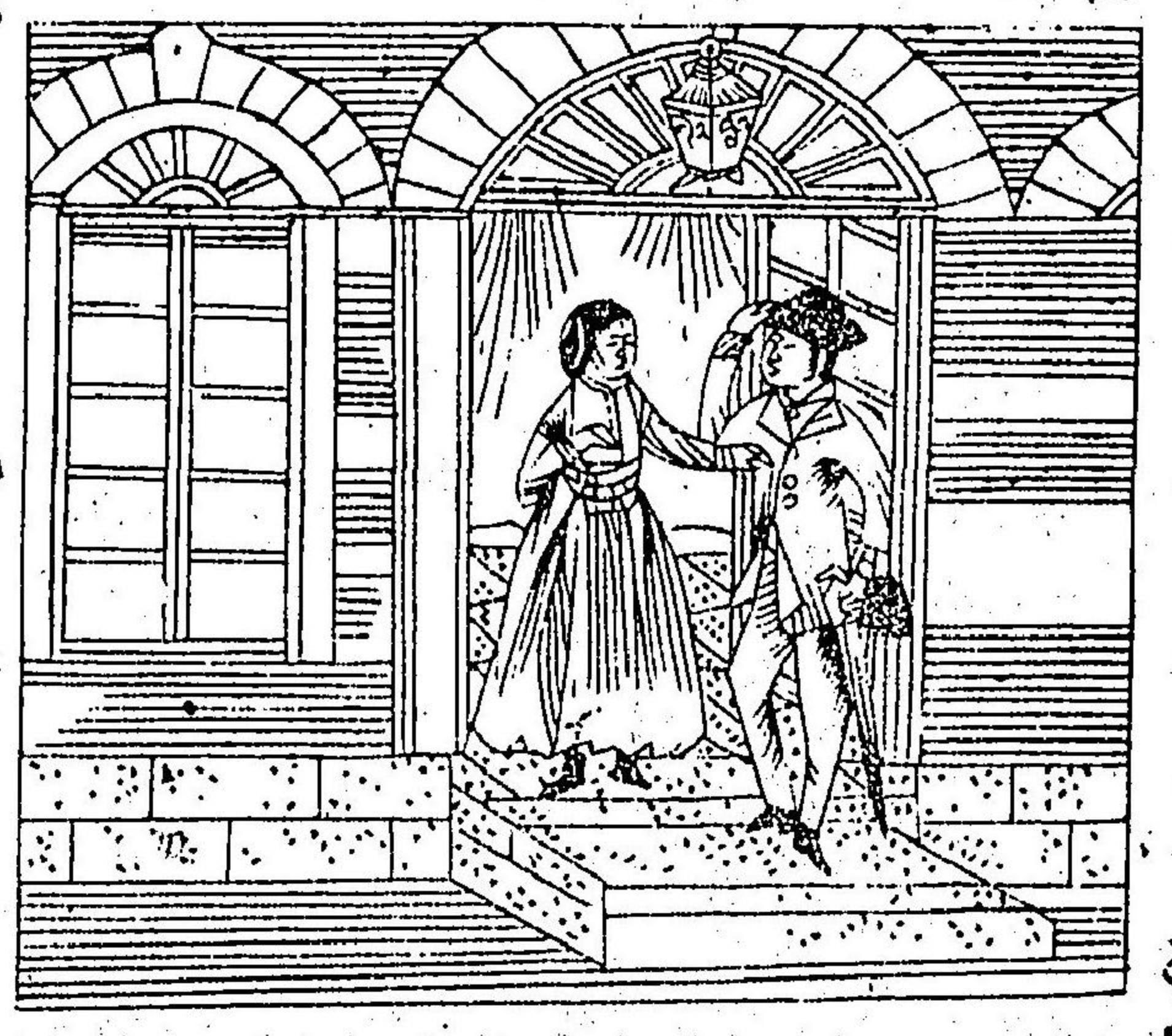
人へ水中まで物を見ること、分明あるは魚へ水中までも、甚分明なり。

そき魚の水中まで能く物を見るへ、其目人と同トありざればあり。

魚へ水中に住る人へ空氣中に住むゆゑも、人の空氣中まで能く物を見るへ、魚の水中まで能く物を見るは同じ。

今この男兒の家を辭して、遠行せんとし、戸前の階を降りたるゆゑ、其妹も階を降りて、これを送り、別は臨みて互ふ言を贈答する所なり。

兄曰、汝慎みて家を守り、能く其身を保つべし、火を過つことなからん、病を生ざることなからん、○妹へ、吾兄寒暑を犯さざらん、又々しく他郷に止まるべからん、と云ふ。



兄又云予、彼郷に到らば、速く書きて以て、安否を報ぐべし。汝も亦其安否を報ぜよ。予が他郷に在る間、只汝の消息を得るを以て、樂と為すべきのみ。

汝等、此二人も何如あるものと思ふや。○これ同胞の孤あり、孤とい、幼稚のとき、兩親を喪ひたるものをいふ。

此二人早く、兩親を失ひたるゆゑ、今自身を立てんとするをう。

今この男子は遠方へ行きて、幾年妹と相見らる

とぞ得ばとも、文字と知るゆゑ、互に書簡を贈答して、其安否を審まらるることと得べし。

も、此二人、文字と知らば、何は因りて、音信を通らるることと得べき。

汝等、此二人の事を見て、能く文字と習ひ、勉めて、書簡を作らることを學ぶべきなり。

むら、ある家は、兄弟の小兒あり、兄は七歳、して、弟は五歳なり。○兄は其才最敏、して、心も亦優しきものあり、弟も、良き性質あり、とも、尚幼きゆゑ、未だ世間の事と知らば、輒も、これ、過らる

舉動とあることなり

けり日、兄弟とも、郊外へ出で、遊べりある
 家の籬へ、小鳥の巢けり、親鳥は人の来るを驚き
 て、飛び去りたり、兄弟は巢の
 中と窺ひ見ると、雛三羽あり、
 弟は悦びて、雛を取りて、持ち
 歸らんとつゝを、兄はこれを
 止めて、親鳥の子を愛するは
 父母の我等と愛し給ふも、同
 じ、今汝この雛と取り去らば、



親鳥の悲何如あらん、若我家入り来りて、我等
 兄弟と捕へ去るものなり、父母の悲と給ふと
 と、幾あらん、ましてや、籬へ親鳥の養は由りて、生
 長まるものにして、今人の手よか、りあべ、決し
 て、育つことあるべからば、今この雛を取
 らざることよけと諭しけむ、弟も、其理は服
 して、兄の教へ、随ひたり、
 此弟の鳥の雛を取らんとするは、殺生するは、
 非きども、其理を論ぎれば、かくの如し、まして、無
 益に、殺生するをや、

されば、縦、小き蟲たうとも、無益に殺さるべし、世の理を知らざる者ハ、小き蟲を殺すを以て、此細の事とせり、實に此細の事は似たりと雖も、此を殺さんと、思ふ心の即、此細の事は、何ら此の心、既ニ慈悲を失ひたるあり、慈悲を失ひたる心、漸長むるに至らば、畜類を殺すのとあり、終よ、人を殺すの大惡よも、陷るべし、豈恐るべきけんや、

故に殺生と、誡むるハ、慈善の人とあるべき階よ、終よ、類まきある善人とともにあり、身の幸福を得るに至るべし、

小學讀本卷之二終

文部省御蔵版翻刻

定價金五錢

明治十六年九月廿七日御届

同 年十月 出版

翻刻出版人

大阪府南區安堂寺橋通三丁目 五十三番地平民

南谷新七

